

Journal of the Research Institute for  
Old Japanese Manuscripts of Buddhist Scriptures  
Vol. II 2017

日本古写経研究所研究紀要 第二号（平成29年）

# 明恵門下における密教理解について

——唐招提寺蔵『六大無尋義抄』解説並びに下帖翻刻——

野  
呂  
靖

## About the Understanding of Esoteric Teachings Among Myoe's Disciples

Sei Noro

*Rokudai Muge Gisho* (六大無導義抄) in two fascicles is a commentary on the Sokushin Jobutsu Gi (即身成仏義) which was written by Jyunsho-bo Koshin who was a disciple of Myoe. Myoe's idea of a correspondence between Hua-yan and Esoteric Teachings in his latter years is a distinguishing feature of his philosophical development, but his reference to attaining Buddhahood in this body (Sokushin Jobutsu) are few and none of those works remain. But within this work one can observe a continuity from Myoe by the use of several Hua-yan teachings. This is a crucial text for understanding the doctrine of attaining Buddhahood in this body (Sokushin Jobutsu) at Kosan Temple.

Although I have already republished fascicle I of this text together with an explanation, I have yet to make a report on the lower fascicle II. As a result of conducting a survey of a text dating to the Forth year of Kencho (1252) possessed by Toshodai Temple, it is clear that this is a valuable manuscript which was written in a time considerably close to the period in which Koshin wrote his work the Sokushin Jobutsu Gi.

In this paper I give an outline of fascicle II which has yet to be introduced together with its republication.

# 明恵門下における密教理解について

## ——唐招提寺蔵『六大無尋義抄』解説並びに下帖翻刻——

野 呂 靖

はじめに

明恵上人高弁（一一七三―一二三二）の没後、門弟たちの間では伝記や遺跡の整備など明恵生前の行状を顕彰する作業が進められていった。そうした明恵没後の高山寺における教学研究の動向については、近年しだいにその実態が明らかになりつつあるが、未翻刻文献の整理など課題も多く、いまだ全体を見通す詳細な解明には至っていない<sup>①</sup>。なかでも、華嚴と密教教義とを対応させる明恵の特異な教学が門弟においてどこまで継承され、さらには鎌倉期の華嚴・真言教学にいかに関与したのかという根本的な問題は十分に明らかとなっていないのが現状である。

本稿でとりあげる『六大無尋義抄』二巻は、『明恵上人行状』『明恵上人歌集』の編纂を行うなど師説の継承につとめた順性房高信（一二九三―一二六四）による『即身成仏義』の注釈書である。明恵は晩年、顕密（華嚴・密教）の一致を主張するなど特徴的な教説を打ち出したが、即身成仏に対する言及は少なく著述も残していない。そのなかで本書には華嚴宗諸師の教学が多数

依用されるなど明恵教学との連続性をうかがうことができ、高山寺における即身成仏理解を知る上で注目すべき内容を含む。

ところで本書のテキストとしては従来、上巻が高山寺蔵本、唐招提寺蔵本、京都大学附属図書館蔵本の三本、下巻はそれに加えて大須真福寺に一本の写本の存在が知られてきた<sup>②</sup>。筆者はこれまで本書の解説ならびに上巻部分の翻刻を行ってきたが<sup>③</sup>、下巻については未翻刻であった。このたび建長四（一二五二）年の書写奥書を有する唐招提寺蔵『六大無尋義抄』二帖について調査する機会を得たが、本文がよく整っているだけでなく、本文と同時期と考えられる詳細な加点が確認され、高信による撰述時期にきわめて近い善本であることが判明した。唐招提寺本の概要及び影印についてはすでに花野憲道氏によって紹介されておりきわめて重要であるが、朱点など必ずしも鮮明でなく、また思想内容に立ち入った検討が残されているように思われる。

そこで本稿では、『六大無尋義抄』の諸本の関係について再度整理した上で、旧稿において紹介できなかった下巻部分の概要を紹介するとともに翻刻を行うことで、明恵没後における高山寺教学の解明に資したい。

## 一 唐招提寺藏『六大無尋義抄』の概要

唐招提寺藏本は、建長四（一二五二）年の書写奥書を有する上下二帖の粘葉装本である。以下に下帖末に記された奥書を示す。

本云

寛元五年<sup>和</sup>二月二日子尅於高山寺東谷禪庵依一人之懇情卒爾草之畢

東谷隱侶高信

元是假名也彼草於高山寺林師令一見賜了 其後依同侶勸進成真名畢矣

建長四年<sup>壬</sup>二月廿八日於丹州神尾山北谷草室聊加點畢遂可再治之也矣

山中非人高信

これによれば、高信は寛元五（一二四七）年二月に高山寺東谷において「仮名」にて本書を撰述し、その後、同門の先輩にあたる義林房喜海（一一七八～一二五〇）の被閲を経て、「真名（漢文体）」に治し、さらに建長四（一二五二）年に丹州神尾山寺（現、京都府亀岡市宮前町）において再治したことがわかる。

ところで『六大無尋義抄』については、唐招提寺本の他に以下の通り三点の写本が現存する。

①高山寺藏本（上下二帖／鎌倉後期写、「高山寺聖教類第二部24六大無尋義抄卷上・下二帖」（『高山寺経藏典籍文書目録』第一、一八四頁上・

下）（下巻一冊／元禄五年永弁写、「同第四部一二六函四八号」）

②真福寺藏本（下巻／康元二年写、『真福寺善本目録』続輯、四五二―四五三頁）

③京都大学付属図書館藏本（上下二巻／書写時期未詳）

これら諸本と比較すれば、①高山寺藏本、およびその臨写本である④京都大学付属図書館藏本と奥書が一致する。<sup>⑥</sup>ただし高山寺本には唐招提寺本と同一の奥書の末尾に「此抄上下明恵上人弟子作也（神尾中興開山号順性）」との一文が付記されており、この点からすくなくとも高山寺本の書写時期は高信による撰述からやや後のものとみななければならない。<sup>⑦</sup>

もつとも唐招提寺本が高信自筆という積極的な根拠は認められない。花野氏も同様にこの点については留保されているが、加點時期を建長四年頃と推定する。<sup>⑧</sup>筆者も料紙や加點の特徴から、高信撰述のきわめて近い時期に書写されたものであると考えたい。今後、高山寺本との詳細な比較が必要であるが、現存諸本のなかで最も古い写本の一つといえよう。

なお、唐招提寺本は上下帖ともに首題下に「方便智院」の朱長方印が押捺されている。寛永年間に編纂されたと考えられる『方便智院聖教目録』（『明恵上人資料』第四）には本写本の記載があることから、すくなくとも江戸時代まで高山寺方便智院に所蔵され、その後何らかの事情で移されたものと考えられる。

## 二 思想的特色

『六大無尋義抄』は『即身成仏義』の注釈であり、上巻では冒頭に「六大無尋常瑜伽」等の所謂「二頌八句の偈頌」を示した後、各句それぞれについての逐語的な注釈が展開されている。また下巻では即身成仏に関する具体的な問題点（疑難）が全二三問答にわたり展開されており、高信の問題意識の所在をうかがうことができる。

本書において依用される文献はいうまでもなく『即身成仏義』『十住心論』など空海の著述が中心をなすが、すでに指摘したようにとくに下巻部分では宗密や李通玄など華嚴文献が積極的に依用されている点が注目される<sup>⑨</sup>。さらに「和尚云」などとして明恵による見解もしばしば言及されている。このことは明恵没後においても高信が生前の明恵の見解を十分に踏まえ、師説を意識しつつ著述を行っていたことを示しているよう。以下、明恵説との関係に留意しつつ、下巻部分に展開される高信の密教理解のなかでも特徴的な箇所をとりあげ検討したい。

## 1 凡夫による即身成仏の可否について

『六大無尋義抄』全編において最も強調される問題の一つが、煩惱を有する凡夫に即身成仏が可能かという点である。高信はこれについて「真言一乗」は凡夫のための教えであり、「末代小国」の者にこそ三密行の有効性が存することを強く主張しており注目される。

先づ自宗修行ノ用心軌則ト云ハ者六大无尋・四曼不離・三密平等等ノ観門ナリ也。本尊ト行者ト同シク有リト躰相用者云ハ如シ上ニ所ノ出ス頌文上ノ六大ノ躰・四曼ハ相・三密ハ用也。此六大・四曼・三密・相應涉入无尋等義ハ上ニ既ニ成シ畢ス。全此ノ六大四曼三密等・本尊ト与行者ト重重无尋ニシテ行者ノ三業悉ク同

スレハ本尊ニ以テ父母所生ノ身ヲ所ノ行・所ル・両部ノ大法忝クモ謂ハ之ヲ法佛ノ三密ト豈ニ非スヤ證スルニ大覺ノ位ヲ止メテ異論ヲ可シ思フ矣。此ノ教ハ非ス菩薩乗教・是レ金剛一乗甚深ノ教也ナリ一一ニ所ノ施設スル以テ佛果ノ法ヲ直ニ所ノ被クル凡夫ナリ也。雖トモ然ト約レハ衆生ノ分ニ煩惱ニモ有リ厚薄根機ニモ有リ利鈍・厚薄・利鈍・悉ク衆生ノ分ナリ也。更ニ於テ所授ノ佛果ノ法ニ无キ浅深也ナリ。(三石左)

高信によれば、仏と衆生の三密が渉入するところが成仏であるという即身成仏の理論にしたがえば、衆生の側に煩惱の厚・薄の違いがあるとしてもそれはあくまで「衆生ノ分」からいうのであって、「所受ノ仏果ノ法」からみれば浅・深などの二分は存在しないというのである。

こうした高信の理解に対し、最も強い疑難として提示されるのが次のような見解である。

問是レ等ノ義ハ本経儀軌・經論聖教ニ・所ノ見・示ス大概ヲ也ナリ。我ガ所疑・フ且ノ先ツ我等・入テ道場ニ雖ニトモ成ニスト六大无尋・四曼不離・三密加持之ノ行・終ニ凡身ニシテ全不ニ見所ノ・為ニル佛・雖トモ在リト道場ニ妄念尚ヲ不ス絶ヘ況ヤ出堂世務ノ三業悉ク為タリ凡夫ノ所作・全ク直ニ不ス可ニ言ニフ加スル法佛ノ三密・成佛之ノ人トハ如何。(四左)

ここでは道場に入り三密加持の行を行ったとしても凡夫の身体の上に成仏の特徴を見出すことはできず妄念が絶えず起こってくることに、また出堂後に行う日常の行為はやはり凡夫の所作となっていることを指摘し、もしそうで

あれば「成仏の人」といえないのではないかとの疑難が示される。

この点について高信は、自らの身体を卑下することはないとした上で、図絵や木像などの三摩耶曼荼羅は如来の三摩耶身・大曼荼羅身であり、生身の尊体となら変わることがないと述べ、たとえ凡夫であろうとその身体の上に三密行を行じ、その結果現れた本尊の三密は「生身の尊と同体である」と指摘している（六右）。さらに、煩惱を断じ、相好円満であつて放光動地などの奇瑞がともなうものが即身成仏ではないと否定し、智儼『孔目章』の成仏説、宗密（圭山大師）による六門成仏の事例を引用した上で（八右）、必ずしも奇瑞を伴わない多様な成仏の様態があるとする。そして、奇瑞の有無や煩惱の有無に執着するのは因果の別体に執着した小乗の義であると批判するのである。

以上のように、高信の密教理解の基本的立場は一貫して「金剛一乗」は凡夫のための教えであり、「末代小国」（三左）の者にこそ三密行が有効であるという点にあったことが知られる。こうした真言行者による機根の問題についてはすでに覚鑒など院政期の真言教学において取り上げられた課題であり必ずしも特異なものではない。また、本書の撰述動機が「為愚昧初心者」（上巻）とされるように高山寺における初心の行者に対し三密行を勧奨する意図が存在したことも指摘できよう。

しかし、明恵においても『華嚴修禪觀照入解脫門義』など晩年の著述では「凡夫の身」による信満成仏が論じられていることは注目される。<sup>10</sup> さらに義林房喜海による寛元元（一二四三）年の著述『善財五十五善知識行位抄』では、やはり華嚴の三生成仏は初心の行者には不可能ではないかとの疑難について長文にわたり議論がなされているが、「初心ノ卑下ヲ懷クコト莫レ」と

結論されている。<sup>11</sup> 寛元元年は高信が『六大無碍義抄』を撰述する四年前に相当する。このように、この時期の高山寺においては凡夫成仏の問題が顕密に共通した課題であつたと考えられるのである。

## 2 信の重視について

以上のような高信の主張の基盤にあると思われるのが、「信」の獲得と開発によって即身成仏が達成されるという理解である。

高信は、「今且ク依ルニ一乗大法ニ其ノ所信ハ上ノ五位成佛之法・一乗普行ノ之門ナリ也。」（二三右）と述べ、「位ノ行・悉ク是レ信ノ徳也ナリ」（二三左）と顕教（華嚴）一乗の立場では全ての行位が信によって裏付けられていたとした上で以下のように指摘する。

学者常ニ奇アリヤシムヲ云ク・我等所起ノ之信心・更ニ不ス可ラ云フ信位ノ撰トハ經論ノ所説信ノ行相教理甚深ナルカ故ニ云々若シ汝等所起ノ信・是非ス信位ノ撰ニ為ム何ノ色ツ物トカ乎ヤ・既ニ非ス住非ス行ニ乃至非ス佛心ニ又非ス向行悪行邪定之心ニ依テ諸門ニ檢ニ之ヲ全ク无キノ謂ヒ也・是ヲ以テ云始從不識三宝名字起一念信等・ト釋家得ヘ理ヲ得ルカ意ヲ故ニ取コト初信位ヲ行相甚以テ為ス浅シト於テ佛境界ニ有ル信欲ノ之心嫌テ之ヲ謂ハ、不ト信位ノ撰ニ我等何ノ日カ始テ得ム信入コトヲ佛家ニ平ヤ・（二四左―一五右）

ここで言及される「始從不識三宝名字起一念信等」という一文は、法藏『探玄記』巻四を踏まえたものであるが、<sup>12</sup> 初心の行者が発す信であつても成仏に至る階位を包摂する意義が込められていることを「和尚〓明恵」の言葉を用いつつ強調する（一四右）。ここから、真言密教においても行法の初め



には必ず大菩提心の行者である金剛薩埵を觀じるのであり、こうした初信が仏道の基盤となるという理解が示されているのである。

こうした信の強調については、高信が自ら述べるように明恵の見解を継承するものであるが、やはり喜海『善財五十五善知識行位抄』に「何況經二説テ云ク、始具縛不識三宝名字創起一念ノ信ト云ヘリ。此二既ニ何ノ信力最劣ナランヤ。(中略)初心ヲ卑下スルコトナカレ」<sup>13</sup>とされている。さらに喜海は、

タトヒ散乱ノ心間起ストモ、能等起ノ心ハ如来ノ意業也。散乱ノ心ハ、元ヨリ凡夫心ナレハ、彼ヲハ不取一念ナリトモ、三業本尊ニ同セハ、仏トイハスシテ何者トカ名ケン。此位ヲ指シテ即身成仏ト云ナリ。<sup>14</sup>

と述べて、散乱心のままであっても行者の三業を本尊に一致させた段階を即身成仏とすると明言しており、ここでも共通した問題意識を窺うことができる。すなわち、明恵没後の高山寺においては、顕教なかでも華嚴の成仏説に依拠しつつ、その信の重要性を根拠として凡心によって起こす信心こそが即身成仏において必須のものであり、この点に凡夫による即身成仏を可能とさせる理解がなされていたといえよう。

### 3 顕密の関係性について

このように華嚴文献を依用する高信において、顕密の関係はいかに理解されていたのであろうか。この点についてはすでに指摘したように、高信においては顕教と密教の成仏説は一致しないとしており注目される。<sup>15</sup>すなわち、法身仏の三密と行者の三業との加持による成仏を即身成仏とする基本的な立

場から、華嚴における十信の満位における信満成仏は「智」の面からいえば即身成仏といえるものの、三密加持を説かない点で異なると明言している(二二左)。さらに、密教の即身成仏は「一生一身」の成仏を説くに対し、顕教(華嚴)の現身成仏は「前世見聞ノ生」を因とした成仏であるとしており(二七左)、この点に密教の優位性を認めている。

このように高信は華嚴教義を下敷きに真言教義を理解するものの、華嚴と密教との「一致」については言及しない。<sup>16</sup>高信は『六大無尋義抄』においては一貫して真言教を「我宗」としており、<sup>17</sup>顕密の区分を厳密に分けている立場が窺われる。ここに明恵との思想的差異が見出されるのである。

### まとめ

以上、唐招提寺蔵本にもとづきつつ、主として下巻部分の思想的特徴について検討を行った。本書の主旨は「凡夫による即身成仏」であったが、それは華嚴文献を根拠としつつ展開されたものであり、また喜海など明恵没後の高山寺に共通した課題が論じられたものであったことを指摘した。筆者は以前、本書が根来寺中性院頼瑜(一二二六―一三〇四)による『即身成仏義顕得鈔』三卷に転用されていることを指摘したことがあるが、そこでも頼瑜が重視したのが「凡夫の即身成仏の可否」に関する問答部分であった。<sup>18</sup>頼瑜はこの点に『六大無尋義抄』の価値を認めていたと思われる。

一方、高信においては顕密一致の主張は慎重に避けられていたことにも注意したい。明恵の思想が後代にいかに関承されたかについては今後さらなる検討が必要であるが、すくなくとも顕密(華嚴・密教)の一致という立場に

ついでには門下においてもその独自性が薄められていく方向に展開したと考えられる。今後の検討に期したい。

【付記】唐招提寺本の閲覧・翻刻に際しては唐招提寺御当局ならびに西山明範師より多大な御厚情を賜りました。また翻刻作成にあたり、小宮俊海師（智山伝法院常勤研究員）より御教示を賜りました。記して衷心より感謝申し上げます。本稿は平成二六年度～二八年度科学研究費若手研究（B）「中世新義真言寺院における華嚴思想に関する研究」課題番号70619220の成果の一部である。



## 唐招提寺本『六大無尋義抄』下帖 翻刻

### 【凡例】

一、本翻刻は唐招提寺蔵『六大無尋義抄』二帖のうち下帖の全文翻刻である。  
二、また、高山寺本を底本とする京都大学附属図書館蔵本との文字の異同について脚注にて注記した。

三、本資料の書誌情報は以下の通りである。

### 【上帖】

表題…六大無尋義抄卷上（外題箋） 首題…六大無尋義抄卷上

尾題…六大無尋義抄卷上

法量…縦二六・七糎、横一七・〇糎、行数八行、字数一六字程度、四八

丁

料紙…楮紙（打紙）、表紙…別表紙（黄蘗）

界線…押界、界高二・三糎、界幅一・七糎

訓点…墨…仮名点（訓・音）、声点 朱…句読点、区切点、合点、声点、

合符（訓・音）

備考…表紙右下に「梅尾方便智院本」、表紙左上に「本中」と墨書あり

首題下に朱方印（「方便智院」）

### 【下帖】

表題…なし 首題…六大無尋義抄卷下 尾題…六大無尋義抄卷下

法量…縦二六・七糎、横一七・〇糎、行数八行、字数一六字程度、五一

丁

料紙…楮紙（打紙） 表紙…別表紙（黄蘗）

界線…押界、界高二・三糎、界幅一・七糎

訓点…墨…仮名点（訓・音）、声点 朱…句読点、区切点、合点、声点、

合符（訓・音）

備考…首題下に朱方印（「方便智院」）

四、翻刻にあたっては以下の方針に基づいた。

①行取りについては紙幅の都合上、本文通りの改行とせず追い込みとした。

②翻字は原態通りを原則としたが、異体字は現行の活字体に改めた。略字（菩薩、菩提など）については開いて表記した。

③訓点については墨点・朱点は反映した。なお、朱点による合点については省略した。また返点のうち雁金点については表記の都合上、レ点にて示した。

④補入符は「○」で示し、脚注にて該当する文字を注記した。

⑤虫損等により判読不能の文字については、□によって字数分の空格を示した。

【翻刻】

(一右)

六大無導義抄卷下

問於テ淨菩提心・及ヒ我等カ處ニ立ル顯得ノ成佛ヲ事コト受所口難キ信用也・真言一家ノ即身成佛義ト者云ハ以テ父母所生ノ身ノ有<sub>下</sub>ラムヲ至リテ究竟果滿ニ放光動地等ノ奇瑞<sub>上</sub>可為即身成佛ト古來皆成ス此ノ義ヲ如何・答爾也上古ヨリ以來出シト即身頓成ノ之人證・一生隔生之ノ違文等・問難數重事既ニ舊畢ス愚昧ノ管見・輒ク何ノ答ム之ヲ・但シ不<sub>レ</sub>見本經本論ノ之文ヲモ不<sub>レ</sub>伺カハ人師先

(一左)

德ノ之抄ヲモ披クニ今此ノ即身義ノ文ヲ如<sub>下</sub>キ云ヒ相應涉入即是即身成佛義ト云イフカ重々帝網名即身<sub>上</sub>ト者六大無導三密平等自他共〇三平等・相應涉入<sub>上</sub>テ重々无盡ナルヲ言ヘリ即身ト如シ成<sub>上</sub>ニ矣・爾レハ此ノ身ニ即チ法佛ノ三密・相應涉入・スルヲ云フ即身成佛ト歟・於テ即身義ノ前後之文ニ更ニ所<sub>四</sub>ナリ不<sub>三</sub>見ニヘテ放光動地等ヲ成スル即身成佛ノ義ヲ文ハ也・問我レ元ヨリ非遮ルニ六大無導三密三平等ノ義一<sub>ヲ</sub>既ニ云カニ密加持速疾顯ト故ニ依テ三密ノ

(二右)

加持ニ速疾ニ成佛セハ者有<sub>上</sub>ラム相好具足放光動地等ノ奇瑞何ソ為<sub>ム</sub>奇シト如何・答且ク又タ我レ問ヘシ汝ニ兩部ノ大法ハ是レ為セム説ク如來法佛ノ三密ヲ教トヤ如何答爾也問彼ノ法佛ノ三密ト者云ハ已成未成ノ諸佛・乃至一切衆生ノ三業・涉入自在ニシテ為<sub>下</sub>セム円満スル无邊ノ德用ヲ之三密<sub>上</sub>トヤ如何・答爾也・問汝此ノ法佛三密可シ見<sub>ル</sub>之ヲ耶・ヤ答彼ノ重々无盡ノ德相我等ヲ争テカ見ム之ヲ乎・問爾ヲハ先<sub>ニ</sub>所<sub>レ</sub>言ノ相好具足等ノ成佛ハ汝等ヲ可シ見<sub>ル</sub>之ヲ耶如何答若シ

(二左)

有テ上根上智ノ機成佛セハ者我等ノ何ソ不<sub>上</sub>ラム見ミ之ヲ・問先ニ言フ法佛ノ三密ハ不<sub>三</sub>スト可<sub>二</sub>見<sub>ル</sub>今汝所ノ可<sub>レ</sub>見<sub>ル</sub>・成佛ト者云ハ可<sub>レ</sub>シ云<sub>三</sub>イフ非<sub>ニ</sub>スト法佛ノ成佛ニハ耶ヤ・若不<sub>ス</sub>爾ヲハ者指テカ何ノ身ノ成佛ヲ云フ即身成佛ト耶ヤ・答率爾ニ欲レハ答セムト之ヲ進退ニ其ノ難得元ヨリ我等カ所ノ成スル不審ハ此等ノ義也ナリ・請フ止テ反語ヲ直ニ示メセ之ヲ・答凡ソ古來ノ學者・異義・云々不<sub>ス</sub>可<sub>レ</sub>勝計ス或ハ付テ大機小機ノ即身義ニ一生隔生之勘文等・本經儀軌之證拠・自宗他宗之違文・互ニ挙テ難破ヲ互ニ盡セリ力ヲ一

(三右)

箇ノ非人・輒スク争テカ決セム古來ノ難破ヲ哉ヤ・但シ我レ全ク雖トモ非<sub>三</sub>スト好<sub>ニ</sub>論難ヲ依テ懇請難ニ背<sub>キ</sub>為<sub>メ</sub>ニ汝カ自行用心ノ可<sub>レ</sub>シス一二ヲ先ツ自宗修行ノ用心軌則ト者云ハ六大无導・四曼不離・三密平等等ノ觀門ナリ也・本尊ト行者ト同シク有リト鉢相用者云ハ如<sub>下</sub>シ上ニ所<sub>レ</sub>出<sub>ス</sub>頌文<sub>上</sub>ノ六大ノ鉢・四曼相・三密用也・此六大・四曼・三密・相應涉入无導等ノ義ハ上ニ既ニ成シ畢ス・全此ノ六大四曼三密等・本尊ト与行者ト重

(三左)

大法忝クモ謂ハ之ヲ法佛ノ三密ト豈ニ非<sub>ス</sub>ヤ證スルニ大覺ノ位ヲ止メテ異論ヲ可シ思フ矣・此ノ教ハ非<sub>ス</sub>菩薩乘教ニ是レ金剛一乘甚深ノ教也ナリ・一一ニ所<sub>レ</sub>施設スル以テ佛果ノ法ヲ直ニ所<sub>レ</sub>被クル凡夫ナリ也・雖トモ然<sub>ト</sub>約レハ衆生ノ分ニ煩惱ニモ有リ厚薄根機ニモ有リ利鈍厚薄・利鈍ハ悉ク衆生カ之分ナリ也・更ニ於テ所授佛果ノ法ニ无<sub>キ</sub>淺深也ナリ・若シ有リト淺深者云ハ非<sub>上</sub>ラム我宗ノ佛果ニハ何ヲ以<sub>テ</sub>故ニ六大四曼三密等ノ德・不<sub>五</sub>ルカ可<sub>四</sub>ラ有<sub>三</sub>ル時トシテ而与衆生ノ三業ト不<sub>ト</sub>云コト涉入セ故ヘ也ナリ・佛ト与我ヲト等・終<sub>ニ</sub>日雖トモ涉入相應スト不<sub>ル</sub>ハ見

(四右)

之ヲ即チ凡夫也ナリ・欲顯得セム此ノ本有ノ三密ヲ未<sub>タ</sub>極顯サ者ハ是レ三密始覺ノ行

人也ナリ。具足シ三密无尋ノ義ヲ住持スルハ三密无尋等ノ義ヲ是如来也ナリ。故ニ離テハ此ノ无尋ヲ无ナカラム四法身三種世間モ撥セハ无尋ノ義ヲ即チ无ナカラム眞法モ其レ實シ四法身三種世間等无尋ニシテ而皆ナ一法也ナリ。一法ト者云ハ即チ是レ究竟果満・法佛甚深ノ三密也ナリ。閉テ目ヲ思念セヨ以テ情執ノ心ヲ不ス可ラ分別ス。問是レ等ノ義ハ本經儀軌・經論聖教ニ所ノ見スル示ス大概也ナリ。我カ所疑フ且ノ先ツ我等入テ道場ニ雖モ成ニスト六

(四左)

大无尋・四曼不離・三密加持之行ヲ終ニ凡身ニシテ全不見所ノ為ニル佛雖トモ在リト道場ニ妄念尚ヲ不ス絶ヘ況ヤ出堂世務ノ三業悉ク為タリ凡夫ノ所作全ク直ニ不ス可ラ言フ加スル法佛ノ三密成佛ノ人トハ如何。答我亦タ問ヘシ汝ニ汝チ朝暮ニ護身結果時キ被甲護身ノ觀念ニ曰ク一切天魔及諸ノ障者悉ク見テ行者ノ威光赫奕コト猶シ如ナルヲ日輪ノ各ノ起シテ慈心ヲ不ス能ハ障導スルコト等云々如ノ此ノ觀念ハ是レ為ム實トヤ為ム不實トヤ如何。答雖トモ法ノ功能ハ如ナリト是ノ如我レ等ラカ懈怠不信ノ輩ヲ結ヒ印ヲ

(五右)

誦セム明ヲ時キ圖ルニ必シモ如日輪ノ而不シ赫奕タラ又定メテ天魔惡鬼ニモ不シ生セ恐怖ヲ矣。問汝依テ身ヲ卑下スルニ還テ疑フ深法若シ爾ヲハ造立シ三昧耶曼荼羅ヲ圖シ繪シテ大曼荼羅身ヲ雖トモ奉ルト安置シ彼レ只泥木ノ形像紙墨ノ尊容ナルカ故ニ更ニ不スヤ成セ佛鉢乎。不ス成セ佛鉢者ハ諸天善神不ス敬重セ之ヲ耶如何。答彼ハ既ニ顯スカ佛像ヲ故ニ何ソ善神冥衆モ不ラム恭敬セ耶。問汝造立圖繪ノ形像既ニ如来ノ三昧耶身・大曼荼羅身ナルカ故ニ許サ善神冥衆恭敬スト之上ヲ者ハ

(五左)

四種曼荼各不離ノ故ニ此ノ三昧耶身乃至法曼荼羅身等即チ為セム同トヤ生身ノ尊

鉢ニ如何。答爾也。即身義云三種問茲ノ形像ノ四種曼荼羅ト与眞實ノ如来四種曼荼羅ト若シ為ム相離ストヤ為ム當ニ不ストヤ相離セ。答不ル相離セ也ナリ。問既ニ形像ト与眞實ト別ナリ何ソ云フヤ不相離ト。答以テ三密ヲ加持スル時キ茲ノ形像ノ曼荼羅則チ成ス眞實ノ曼荼羅ヲ所ニ以テ三不ナリ相離セ。問若爾ハ如ク眞實ノ曼荼羅說法利生スルカ為スヤト形像ノ曼荼羅モ說

(六右)

法利生耶。答已ニ云下以テ三密ヲ加持スル時キ成中スト眞實ノ曼荼羅上ヲ如何不ラム說法利生セ也。問形像ノ曼荼羅說法利生セム方ヤウ如何。答經問爾ヲハ汝カ自性清淨心ノ御衣木上ノ運ヒテ三密ノ行ヲ所ノ印現スル本尊ノ三密ハ為下セム与生身ノ尊ト同トヤ否ナヤ乎。答其ノ理定メテ雖トモ可シト為ナル同鉢尚依下テ我カ所作ス行ニ成シテノ本尊ノ鉢ヲ齊カラムコト生身ニ所口難信用シ也ナリ。我今聞ク此ノ語ヲ膏盲ノ病醫王猶ヲ拱タク手ヲ雖トモ救療ニ无シト由シ諸佛以テ一大事ノ因縁ヲ唯タ、非四ス授三衆生心中本来自

(六左)

性清淨ノ理ト与佛ト等クシテ无差別三密加持ノ故ニ泥木ノ形像猶ラ既ニ許ス有リト說法利生ノ之功況ヤ汝本有本始両覺ト与佛ト雖トモ恒然ナリト常ニ所覆蔽シテ六塵煩惱ニ不ス能ハ顯ト出スルコト佛發シテ悲願ヲ欲四カ令三メムト拔濟シテ衆生ヲ如ナラ我カ故ニ授テ三密ノ印法ヲ速疾ニ顯得スル之ヲ也ナリ。藏云衆生蒙テ佛加持力ヲ突一破シテ六塵ノ淤泥ト出ト現ス自心ノ覺理ヲ如シ頼テ春雷響ニ蟄虫出ルカ地ヲ与佛ト等シク○義等ノ云々出現自心覺理者云ハ依テ此三密加持ニ方ニ住シタマヘル汝カ心心蓮臺ニ本来

(七右)

具足三身ノ德・三十七尊等ノ出現スル也ナリ。汝且ク掩滅後之愁ヲ成セ如来再現之ノ歎ヲ何ソ无一端アチキナクモ致シテ於疑滯ヲノニ欲スル失セムト佛ノ本懷ヲ平カ依カ三密ノ加

持・ニ故・ニ泥木猶シ云<sup>三</sup>・フ有<sup>二</sup>リト・生身勢力・況ヤ於テ<sup>〇</sup>有識ノ者・ニ乎・問爾ナリ也・三密加持甚深ノ功德・我当ニ信ス此・但シ我カ不信ニシテ而行・セムト与汝カ信受シテ而行・セムト更不見其ノ異・ヲ設ヒ汝在テ道場・ニ一念ノ觀智与教相應セム時キ雖<sup>四</sup>トモ許<sup>三</sup>スト有リト与佛・齊等ナル分我モ也汝モ也出堂以後起サハ貪瞋痴等ヲ何ソ謂ハム之ヲ即身成佛

(七左)

之人ト終イニ盡シテ煩惱所知ノ之ニ障・ヲ相好円満シ具シテ放光動地之奇瑞・以テ至ラムヲ无上覺位・ニ可キ云フ即身成佛ト也ナリ・有リ經論ノ明文モ上古ノ先德モ立ス此義・教理已ニ極成セハ此ノ一ヶ疑ハ更ニ所口難キ晴レ也ナリ如何・答汝等凡夫妄情ノ前ニ依テ執シ因果之別・計<sup>中</sup>スルニ三世ノ<sup>〇</sup>不同<sup>上</sup>於テ妄盡ノ處・ニ因テ立ツ成佛ノ之一義・ヲ是レ則チ權小等所ノ施設スル意ナリ也・顯家一乘ノ談・猶ヲ以テ因果是レ一煩惱菩提是一等ニシテ・无シ凡聖ノ異若一念合レハ此ノ佛智見ニ一念即佛也ナリ・況ヤ於

(八右)

真言成佛ノ軌則・ニ乎ヤ・今且ク付テ時・ニ云フニ之ヲ法佛ノ之三密ヲモテ加スル行者ノ三業・ニ時ト云<sup>〇</sup>是越タル三時・ヲ如来之ノ日・加持ノ故ニ已成未成ノ一切ノ諸佛ノ三密・一切衆生ノ三業・悉ク与今ノ時ノ我カ三業ト平等ニシテ无シ一分ノ差異以下ノ時ニ无シ<sup>〇</sup>ニ依テ法・法・立<sup>上</sup>スルヲ故ニ離レテ今時ノ三密ノ之・ニ无カ時故ニ与二世諸佛ノ正覺ノ時・ト在同時・ニ也・何ヲ以ノ故ニ以テ三密功德・為時・ニ故ニ也・是等ノ義意ハ於テ前後・ニ多ク雖トモ出スト之ヲ汝以テ捨劣得勝ノ心・於テ妄盡放光等ノ處・ニ深ク執ス成佛ノ

(八左)

一義ヲ守ル一隅・意更ニ所口難キ捨テ也ナリ・凡ソ成佛ノ門・非ス一途・今且ク至相大師孔目章ノ中ノ成佛ノ建立・出シテ之ヲ欲<sup>四</sup>フ令<sup>三</sup>シテ汝カ狭心ヲ捨<sup>二</sup>テ之ヲ・約スルニ人天乘・ニ有リ三種ノ成佛・一為メニハ三惡習ノ現ス黑象ノ身等ヲ・二為メニハ引カ人趣ヲ現ス

樹神ノ身等ヲ・三為メニハ引カ人天・ヲ為ニ現ス其ノ聖身ヲ・約スルニ二乘・ニ有リ七義ノ成佛・一約スルニ地・ニ三界九地等ノ外・ニ即チ成ス其ノ佛ヲ・二約スルニ位・ニ見修已外・ニ即チ成ス其ノ佛ヲ・三約スルニ行・ニ无學ノ身ノ中・ニ即チ現ス成佛ヲ・四約スルニ菩薩ヲ行・ニ三十三心ノ外・ニ即チ成ス其ノ佛ヲ・五約スルニ時・ニ三

(九右)

僧祇外・ニ即チ成ス其ノ佛ヲ・六約スルニ生死最後分段身上・ニ即成其佛・七依小乘十二住・ニ第十二最上阿羅漢住・ニ則チ同ス是レ佛ニ・迴心教門・ニ有リ八義ノ成佛・一約スルニ地位・ニ乾惠等ノ十地之中第十地・ニ即チ成佛・二約スルニ三界九地等・ニ三約シ位・ニ四約シ行・ニ五約シ時・ニ<sup>三</sup>大乘六約ス菩薩ノ行・ニ<sup>如五義</sup>七約スルニ无分別空理一念・ニ即チ成ス其ノ佛ヲ・八約シテ生死最後分段身上・ニ成シ佛ヲ約スニ化分段身後・ニ成ス佛ヲ・身ノ報初教直進位・ニ有リ七門ノ成佛・一約スルニ位・ニ從リ十信位等乃

(九左)

至満足十地已外・ニ即チ成ス其ノ佛ヲ・二復約スルニ位・ニ從リ歡喜地盡シテ第九地・ヲ於テ第十地・ニ即チ不退・ニ成ス其ノ佛ヲ・三約スルニ理・ニ眞如无分別空一念・ニ即チ成ス其ノ佛ヲ・四約スルニ十地後一念證果・ニ即チ成ス其佛ヲ・五約スルニ時・ニ大乘三僧祇後・ニ即チ成ス其ノ佛ヲ・六約スルニ行・ニ究竟无學・ニ即チ成ス其佛ヲ・七約スルニ大乘十二住・ニ於テ第十二最上菩薩住後・ニ即チ成ス其佛・約スルニ大乘終教・ニ有リ十門成佛・一約スルニ位・ニ從リ十信行・乃至第十地滿後・ニ即チ成ス佛ヲ・二從リ歡喜等ノ地盡シテ

(一〇右)

第九<sup>〇</sup>・ヲ於第十地ノ中・ニ即チ成ス佛ヲ・三約スルニ位・ニ乃至第八地已上ヲ名ク出々世・ト即チ得ウ<sup>〇</sup>佛ヲ・四約スルニ无分別眞如一念・ニ成ス佛ヲ・五約スルニ證・ニ於テ初地ノ中・ニ<sup>〇</sup>念證ノ故ニ明ス一念成佛ヲ・六於テ十地後・ニ一念證果ヲ名ク一念成佛ト・七約スルニ時・ニ大乘三祇後・ニ即チ是レ佛ナリ・八約スルニ行・ニ金剛心後・得一切智々ヲ



即チ是レ佛・九約スルニ生死滅ニ七種生死後即チ是レ佛・十依ルニ大乘同姓經ニ有リ  
三種ノ十地聲聞ノ十地・緣覺ノ十地・佛十地・約スルニ頓教有リ一門謂ク无相也ナリ  
由カ成スルニ一

(一〇左)

行三昧ヲ故ニ一切俱離・是レ名ク佛ト也・約スルニ一乘ノ義ニ謂ク十信終心・乃至十  
解位・十行・十迴向・十地・佛地・一切皆ナ成ス佛ヲ・更ニ云々又依テ花嚴經ニ立ツ五種ノ疾  
得成佛ヲ一依テ勝身ニ一生即チ得ウ・二依テ見聞ニ逕疾剋・三依テ一時ニ疾得成佛  
四依テ一念ニ疾得成佛五依テ无念ニ疾得成佛・於テ勝身一生ノ成佛ニ又有リ四類  
一依ル世界性等ノ十世界ノ身ニ輪王之子・現身成佛如シ普莊嚴童子等ノ・二依天  
子勝身ニ從リ二惡道出シテ生テ・兜率天ニ

(一一右)

現身成佛・三依ル閻浮提勝功德身ニ如シ善財等ノ現身ニ究竟シテ普賢之行ヲ後チ  
生身ニ見ル佛ヲ・四ル依法花經龍女ノ身ニ南方ニシテ成佛ス義當ル留惑之身ニ疾得  
成佛・圭山大師依是等義又立六門成佛一小乘<sup>悉達太子</sup>○四花嚴心住ニ成佛<sup>一念佛</sup>  
六円教<sup>佛本</sup>・已上取テ要ヲ出ス之ヲ本文更ニ勘ヘヨ・成佛ノ義諸教ノ之建立如シ此ノ  
努<sup>ユメ</sup>莫レ執<sup>コト</sup>一隅ヲ依テ是等ノ義門ニ情<sup>ツラ</sup>探ルニ即身成佛義ノ之素意ヲ前後皆出シ  
テ六大四曼三密

(一二左)

平等ノ法益甚深ノ之義ヲ以佛身ト行者ト涉入重々ナルヲ可シ言トル即身ト誠ニ三密加  
持等即身頓成ノ之義・諸教建立ニ闕テ所ロ不見也ナリ・而學者勘フルニ其ノ文證ヲ  
出シテ一生隔生等ノ之違文ヲ對論數重雖トモ中古ニ事舊タリト未タ聞カ入門ノ是非ヲ  
故ニ空ク迷フ勝進ノ直路ニ者ノ也ナリ・今且閣テ自他宗ノ中ニ成佛遲速ノ之義ヲ成<sup>ヲ</sup>立  
セハ三密修行ノ用心ヲ成佛頓漸ノ優劣モ自ラ顯ナム焉問我レ雖トモ思フト其ノ義ヲ他宗

競ヒ難シ・自宗違文見タリ左右ニ須ク依テ位地ノ建立修行ノ時分ニ定<sup>中</sup>

(一二右)

成佛遲速ト<sup>上</sup>故ニ勞テ於彼此ノ之難破ニ徒送ル年月ヲ・云ヒ本文ト云學者ノ義ト不ス  
遑アラ毛拳ニ先ツ於テ自宗ニ立ルコト位ヲ不ス一純ナラ或ハ自リ信位立テ位ヲ或ハ三賢  
位ハ當宗ノ意ヲ尋テ立不立等ノ之證拠・或ハ十地斷惑有無ノ義或ハ八地三昧道ノ驚  
覺或ハ十六大菩薩十地配尺等如ノ此・義文云々・於テ即身成佛ノ時劫ニ亦以テ云々  
汝如シ先ニ示スカ一生隔生ノ相論・或ハ信位初心ノ成佛・或ハ從凡入佛位ノ義・或ハ行  
成ニシテ而非ル所得ノ果ニ義等・勘ルニ此等違文ヲ短命半ハ暮レテ空シク失ス修行ノ

(一二左)

要路ヲ如キノ我等ノ者ハ只タ・指シテ一文ヲ欲フ聞ムト其義ヲ必シモ我モ不サル好マ重々ノ  
難破也ナリ・請フ示メセ之ヲ・答聞ク今ノ問難ヲ小学弥ヨ迷ヘリ是非ニ但シ懇請難カ  
背キ故ニ聊カ可シ成ス其ノ義・先顯家ノ五位修行ノ階降ト云者ハ依ルニ三乘教ニ終ニ有リ  
三賢十地等初後淺深ノ之不同定ムルニ其時劫ヲ經ニ祇百大劫・成ス覺道ヲ如常ニ  
説カ・約スルニ一乘教ニ文不ルカ可カラ重書ス故ニ雖トモ以タリト有ルニ前後於一念ノ中  
ニ五位行悉ク在ル之也ナリ・先信位ト者云ハ但成スル根器ヲ也・信スル外道天魔ヲ者  
ヲハ名ケ邪信ト・々スル小乘三乘ヲ者ハ

(一三右)

名ケ小乘三乘ノ信ト・々ヲハ一乘普法ノ名ク一乘ノ信ト・隨テ所信ノ法ニ雖トモ有ト淺  
深定ムルニ其信心ノ分位ヲ自下リ未タ分別セ是邪是正ヲ但タ依リ知識教訓ニ任セテ正教  
ノ文義ニ生得善心ノ中ニ始テ起<sup>中</sup>ス一念ノ之信心上ヲ可キ取ル之ヲ也ナリ今且ク依ルニ一乘  
大法ニ其ノ其所信ハ上ノ五位成佛之法・一乘普行ノ之門ナリ也・其ノ所信ノ法遍ス  
ルカ五位故能信ノ之信モ撰シテ五位ノ法ヲ在リ信ノ中ニ故ニ其ノ後々位ト者云ハ・但是  
レ信ノ増勝ヲ為ス異ト・然ハ離テ信ヲ更ニ无キ後位也ナリ・若シ後位ノ諸門云ハ・離テ

信ヲ而有<sup>中</sup>リト之上レ者全ク

(二三左)

无シ其理何ヲ○故ニ後位ノ諸門・離テハ信ヲ不<sup>レ</sup>ルカ可<sup>レ</sup>ラ有<sup>ル</sup>其ノ自<sup>レ</sup>躰○也ナリ謂ク初信ハ雖トモ不<sup>レ</sup>スト分別邪正・ヲ信行漸ク熟シテ發シテ人法二无我ノ信智ヲ安住シテ真理ニ成ヲ不退位ノ名ク初發心住ト故ニ十住智ト者云ハ即チ是レ十信ノ中ノ惠心也ナリ・若シ信ノ中ニ无シテ惠信<sup>④①</sup>而但タヘ信心ノミナラハ者至ル住位ニ時何ソ能<sup>レ</sup>ヨク發サム深般若ノ智ヲ乎ヤ・然ハ則チ開テ信ヲ廣ク成カ後位ヲ故ニ諸位ノ行悉ク是レ信ノ德也ナリ但シ如ク合シテ十心ヲ以名カ信ト合シテ十心ヲ又名ク住ト々位豈ニ无ム信乎思ヘ之ヲ・又十行位ト者云ハ住智住シテ二空ノ理ニ之後・所行スル皆是レ稱理ノ行也ナリ此

(一四右)

名ク十行位ト・稱理ノ行・自然ニ流至ス三處ニ是レ十廻向ナリ也大悲下化ノ故ニハ向テ衆生ニ以成シ化身ノ因ヲ大智上求ノ故ニハ向テ十地智並ニ佛智ニ以成ス報身ノ因ヲ以ノ導テ前ノ二ヲ令ルヲ稱カナハ實ニ故ニハ向テ實際ニ成ス法身ノ因ヲ・十地ト者云ハ夫功不ス虚設セ終ニ必ス有リ帰スルコト前ニハ顯ス解ノ導クコトヲ行願ヲ故ニ賢位ハ因ノ終ナルヲ今ハ明ス智・冥コトヲ真如ニ故ニ聖位果立ス・然レハ則チ上大智大悲大行之ノ三・齊ク増修増上長シテ円滿究竟スルハ是證位ナリ也・是ヲ以テ一乗ノ信ハ遍在スト五位者云ハ此レ等ノ謂ヒ也・於信位ニ已ニ佛果ヲ為スルカ所信ノ境ト故ニ此信・開クル位ニ

(一四左)

具シテ後々ノ諸位ヲ信德甚深ナリ也・雖トモ然ト初心ノ信ト者云ハ不分別セ善惡ノ只タ、生得善心ノ中ニ暗○大法ヲ也○<sup>④②</sup>學者常ニ奇アヤシムヲ云ク・我等所起ノ之信心・更ニ不<sup>レ</sup>ス可<sup>レ</sup>ラ云フ信位ノ撰トハ經論ノ所說・信ノ行相教理甚深ナルカ故ニ・云々若シ汝等所起ノ信・是非ス信位ノ撰ニ為ム何ノ色ソ物トカ乎ヤ・既ニ非ス住非ス行ニ乃至非ス佛心ニ又非ス向行惡行邪定之心ニ依テ諸門ニ檢ニ之ヲ全ク无<sup>レ</sup>其ノ謂ヒ也・是ヲ以テ云始

從不識三寶名字起一念信等・積家得ヘ理・得ルカ意ヲ故ニ取コト初信位ヲ行相甚以テ為ス淺シト於テ佛境界ニ有ル信欲ノ

(一五右)

之心嫌テ之ヲ謂ハ、不ト信位ノ撰ニ我等何ノ日カ始テ得ム信入コトヲ佛家ニ乎ヤ・<sup>上諸義ニノ次諸義ニ</sup>普撰一切諸地功德ノ故ニ在テモ何ノ位ニ必ス一位ニ撰スル一切ノ位ヲ也ナリ但シ以ノ信ハ无<sup>レ</sup>キヲ位ニ撰シテ撰テ諸位ノ德ヲ在コト初發心住ニ是レ常途ノ性相ナリ也如シ十明論ニ云カ一々ノ諸位ノ中・波羅蜜ノ行別ナリ・互ニ參テ名ノ不同ナレトモ・不ス離レ初發心ヲ・云々和尚常ニ云ク・想ニ像ナルニ此釋文ノ意趣・若シ以テ所信ノ法ヲ離讓ラハ功ヲ於能信ニ可シ謂フ互恭各不同不離初信心上ト更甚タ有リ味・ヒ學者留メヨ意ヲ矣而ヲ住地建立ノ不同・或於テ一經ノ上下ニ

(一五左)

不<sup>レ</sup>同・カラ如キハ仁王經ノ上卷ノ說キ五忍ノ亦有リ五十二位下卷ニハ說ク十三法師・瑜伽論ニハ立テ十二住ヲ於テ十三住ニ立ツ七地ヲ・依ルニ瓔珞經ニ有<sup>レ</sup>四十二賢聖位・亦立ツ種姓ヲ・如上ノ諸門・諸宗ノ解釋・信三賢等妙二覺等・開合不<sup>レ</sup>同カラ・真言ノ信地建立亦以テ難シ一定・大日經疏ニ分テ十地ヲ為シ因根究竟ト開テ佛地ヲ為ス上々方便ト・或ハ於テ第十地中ニ撰ス佛果ヲ・或ハ云ヒ四十二地階不同ト・或ハ云フ三賢十聖等ト・是皆ナリ以テ顯家漸次ノ之位地・ヲ顯ス秘宗頓成勝

(一六右)

德ヲ之時キ隨テ義便ニ用之ヲ莫レ堅執スルコト一門ヲ矣現世證得歡喜地後十六生成正覺ト者云ハ即寄シテ三乘證位ノ初地ニ顯頓成ノ深旨ヲ也十六大菩薩ト云ハ者仁王般若陀羅尼秘尺云ク・不空於テ瑜伽教ノ中ニ成スル普賢行ヲ十六行ハ如シ聲聞ノ見道ノ中ノ十六行ノ也・云々譬ハ如シ有レハ中方必ス有リ四方有レハ四方又成<sup>中</sup>スルカ十六方ヲ聲聞ノ十六行ト者云ハ即チ以テ四諦・成スルコト十六行・亦タ復タ如シ是ノ於テ一々ノ諦ニ



有カ四行故ニ成シテ十六行ヲ終ニ建立无余涅槃ヲ十六大菩薩ノ建立又如シ

(二六左)

此ノ四佛ハ如シ四諦ノ十六大菩薩ハ如シ十六行ノ四諦ノ理ト者云ハ是レ无余ノ一理ナリ  
也以テ四佛ヲ如シ成カ大日一尊ヲ又於テ大乘ノ初地ニ立ツルコト十六心相見道ヲ例  
シテ又可シ知ヌ矣十六大菩薩ノ初メ云金剛薩埵ト者初地ノ大菩提心融シテ〇佛  
ヲ見一如ト之智ヲ名金剛サタト々々ハ是レ大有情也ナリ是レ即チ有ル堅固ノ道心  
人也ナリ王者此ノ人ハ是レ為タリ一切衆生ノ中ノ王愛ト者云ハ此人護念スル諸佛ニ喜ト  
者云ハ大菩提心ノ行者佛果ノ万徳満其ノ心ニ妙適之コニ極ル合テハ此ノ四菩薩  
ヲ為東方阿閼尊ト是レ發心

(二七右)

住ノ主也ナリ寶光幢咲・法利因語・業護牙拳等・四轉方便・三句ノ法文・五智ノ菩  
提・配シテ以テ准知セヨ之ヲ至ル金剛拳ノ位ニ時キ於テ諸佛衆生事業ノ中ニ業常ニ着  
テ堅誓慈悲ノ甲冑ヲ護摧破シテ魔軍衆ヲ牙堅ク拳ル諸佛秘密門ヲ也拳甚深々々更  
ニ問ヘ縦ヒ雖トモ初心ノ行人ナリト於テ此ノ十六大菩薩ノ建立ニ若シ闕セハ一種ヲ非ス  
我宗修行ノ軌則ニハ也故ニ行法ノ初ニ令テ行者ヲ觀セ金剛薩埵ト是レ大菩提心ノ行  
者也ナリ先ツ依ルカ茶羅阿闍梨ノ加持ニ故ニ於テ現生ノ中ニ速ニ

(二七左)

得ウ初地ノ功德ヲ稱シテ此人ヲ為ス金剛サタト此ノ金薩又以テ欲觸愛慢ノ四菩薩ヲ  
為眷屬ト欲菩薩ヲ持スルハ箭ヲ如下シ世間ノ箭ノ能射イ取トルカ遠キ物ヲ凡位大菩提  
心ノ之欲・遠ク表射イ取トルコトヲ佛菩提ノ妙果ヲ也觸菩薩ノ抱クハ金薩ヲ既射イ取カ  
大菩提ノ果ヲ故ニ堅ク抱持シテ不ル失セ義也ナリ愛菩薩持スルハ摩竭魚幢ヲ大菩提  
心堅ク抱持スルカ故ニ高ク出テ三有ノ城郭ヲ必ス食噉<sup>④</sup>苦提ノ功德ヲ表相ナリ也慢  
菩薩ト者云ハ設ヒ雖トモ有リト菩提心其ノ心卑劣ナラハ未タ足為スルニ勝ト既ニ此心高ク

出テ有リ勇健ノ勢故ニ作シテ慢印ヲ押サス腰ヲ然ハ中

(二八右)

金薩ハ合シテ四菩薩ノ徳ヲ成スル一種ノ大菩提心ヲ也ナリ是即チ依テ阿闍梨ノ加持ニ除  
テ弟子俱生ノ我執ヲ淨メテ末那ノ四惑ノ成スル四菩薩ノ徳ヲ也汝等依テ師教ニ翻我  
執ヲ愛ト樂スル佛菩薩ノ功德ヲ等ノ心中勘ルニ之ヲ高ク有ルカ出ル三有ノ城郭ノ心故  
ニ世以テ為セム尊ト也然レハ此ノ五尊建立ハ始終皆ナ表ス五智円満ノ義ヲ大菩提心  
ノ行者以テ平等ノ大智大悲對シテ生佛ニ鉤召引入縛スルニ更ニ无シ上下勝劣ノ障有  
カ大智故ニ鉤召シテ佛徳ヲ入レ我身ニ有カ大悲故ニ引テ衆生ヲ入ル佛家ニ有カ大智  
故ニハ必ス有リ大悲

(二八左)

有ルカ大悲故ニハ必ス有リ大智非智相導甚深々々  
語利行同事之四攝ノ行ト々布施ヲ者ハ能ク攝ス衆生ヲ持スル鉤ヲ表相等以テ可シ知ヌ  
真言秘密門・令シテ此ノ義ヲ誦シ于真言ニ結ハ于印契ニ三密相應速疾ノ之益以テ  
可シ知ヌ此金剛サタヲ或ハ〇毘盧舍那他受用〇或ハ為ス始覺ノ修真言行者ト  
即身義引テ五秘密軌ヲ云ク若シ依ニハ毘盧遮那佛ノ自受用身所説ノ内證自覺聖智  
ノ法及ヒ大普賢金剛薩埵

(二九右)

他受用身ノ智則チ於テ現生ニ遇<sup>アツテ</sup>逢曼荼羅阿闍梨ニ得テ入ルコトヲ曼荼羅ニ為ニ具足  
ス羯磨ヲ以テ普賢三摩地ヲ引入シテ金剛薩埵ニ入テ其身中ニ循ヨルカ加持威徳力ニ  
故於須臾ノ頃ニ當ニ證ス无量ノ三昧耶无量ノ陀羅尼門ヲ以テ不思議ノ法ヲ能ク變易ヤ  
クシテ弟子ノ俱生ノ我執ノ種子應シテ時ニ集得シテ身中ニ一大阿僧祇劫ノ所集ノ福德  
智慧則チ為ナリヌ生在スルニ佛家ニ其ノ人ハ從リ一切如來ノ心生シ從リ佛口生シ從リ  
佛法生シ從法化生シテ得佛ノ法財ヲ々々ト者云ハ謂ク三密ノ菩提心ノ教

(一九左)

法ナリ、此ハ明ナリ初テ後ル菩提心戒ヲ時キ由縁ニ見レハ曼荼羅ヲ能ク須臾ノ頃ノ淨信ヲシテ以テ歎喜ノ心ヲ瞻睹スルカ故ニ則チ於テ阿頼耶識ノ中ニ種ウフ金剛界ノ種子ヲ海會ノ諸尊ヲ所ノ得益ヲ具ニ受テ灌頂受職金剛名号ニ從此已レ後受得シテ廣大甚深不思議ノ法ヲ超越スニ乘十地ニ此大金剛薩埵五密瑜伽法門ハ於テ四時ニ行住坐臥ノ四威儀之中ニ無間作意シ修習スレハ於テ見聞覺知ノ境界ニ人法ニ空執悉ク皆ナ平等ニシテ現生ニ證得シテ初地ニ漸次ニ昇進由テ證スルニ五密ヲ於テ涅槃ト生死トニ不染セス

(二〇右)

著セ於テ無邊ノ五趣生死ニ廣クノ作ス利樂ノ分テ身百億ニ遊テ諸趣ノ中ニ成就シ有情ノ令證セ金剛薩埵ノ位此ハ明ス依テ儀軌ノ法則ニ修テ行スル之時不思議ノ法益ヲ也又云ク三密ノ金剛ヲ以テ為シテ増上縁ト能ク證ス毘盧舍那ノ二身果位ヲ如ノ是ノ經等皆說ク此ノ速疾力不思議神通ノ三摩地法ヲ若シ有テ人ト不シテ闕法則晝夜ニ精進スレハ現身ニ獲得シテ五神通ヲ漸次ニ修練シテ不シテ捨テ此身ニ進テ入ル佛位ニ具ニハ如シ經ニ說カカ此義ニ故ニ曰ク三密加持速疾顯ト文若依毘盧遮那自受用身所說內證自覺聖智

(二〇左)

法大普賢金剛薩埵他受用身智ト者云ハ以毘盧遮那ノ為シ自受用身ト以金剛薩埵ヲ為ス他受用身ト則於現世遇逢曼荼羅阿闍梨ト者云ハ阿闍梨ハ即チ是レ師也ナリ此ノ為ス金剛薩埵他受用身ト也得入曼荼羅為具足羯磨問更以普賢三摩地引入金剛薩埵入其身中ト者云ハ師加持スル弟子也於須臾頃當證无量三昧耶等以下ノ文更ニ問之ヲ現生證得初地漸次昇進由修五密於涅槃生死不

(二二右)

染不着於無邊五趣生死廣作利益トハ者依カ灌頂阿闍梨加持羯磨ニ故ニ又由下カ自ラ聞ク大法ヲ之修行力ニ故ニ於テ生死涅槃ニ不染セス不着セテ大願力ヲ遊テ五趣

ニ以利益生ヲ是レ即チ明ス法益甚深ノ義也雖下トモ云中ト金剛薩埵是レ毘盧遮那他受用身等ト出ス其ノ法益47時云フ現生證得初地漸次昇進於無邊五趣生死廣作利益等ト乃至現身獲得五神通漸次修練不捨此身進入佛位故曰三密加持速疾顯ト者云ハ大師引テ

(二二左)

是等ノ軌ノ文ヲ為スル小機即身成佛ノ證トヤ將タ為シタマフ大機即身成佛ノ證トヤ既ニ云ヒ於無邊五趣生死廣作利樂ト又云フ得五神通漸次修練等トノ可キカ48為ス小機ノ證ト歟若シ云カ能證毘盧遮那三身果位ト故ニ又可キ為大機ノ證ト歟若シ又タ為而證ト者於テ今ノ軌ノ文ニ立ル幾ノ金薩ヲカ乎ヤ問顯家一乘等ノ意雖トモ云ト初發心時便成正覺ト而モ還テ立ツ後位ノ修行ヲ今又得テ薩埵位ヲ後有ラハ得五神通漸次昇進等義者与彼ノ義ト有ラム何ノ差異カ乎ヤ答自ヨリ元モト我カ所ロノ

(二二右)

成立スル以テ法佛ノ三密ヲ加持シテ父母所生三業成スルヲ如來三秘密門ヲ云テ即身ノ義ト也ナリ引テ三密加持以為増上縁能證毘盧舍那三身果位ノ文ヲ次ニ云ヒ此速疾力不思議神通三摩地法ト次ニ又タ若有人不闕法則乃至得五神通漸次修練等ト49○依テ三密加持ニ證スルヲ三身ノ果位ヲ雖トモ云ト速疾力ト定ムル其ノ修行益ヲ時云フ得五神通漸次修練等ト也思之縱ヒ雖トモ建立說相々似又非ス可キニ无カル優劣凡ソ三密ノ行門ハ自リ初心ノ地位ノ修行也ナリ其ノ意義

(二二左)

住スルハ不生ノ之理ニ是レ十住ノ智身ニ結フハ密印ヲ是レ稱理ノ行ナリ也口ニ誦シテ真言ヲ如ク行ノ能ク説クハ是レ大悲行等即チ十廻向ナリ也此ノ大智大悲大行ノ三齊シク具足スルカ故ニ十地也然レハ則チ此證同シク合シテ為ス三密ノ行ト也此ノ智慧行円滿スルヲ号スルカ佛ト故ニ纔ニ修スル三密相應ノ行者ノハ大智大悲大行ノ三

齊シク具スル也ナリ。智慧ノ門・齊シク増修増一長セム者ノハ非スハ十地ニ處セム何ノ位ニカ  
乎ヤ。大智因大悲根大行<sup>究竟</sup>之三心・垂<sup>レ</sup>レハ因人ニ為ス十地三賢・約シテハ果徳ニ為ス  
方便究竟ト初後ノ之別論ハ纔ニ

(二三右)

寄スル因人ニ之所説・不生ノ之徳相ハ是レ約ス果位ニ之修行也。若シ就テ宗本云  
ハ之ヲ三密平等行人ハ悉ク皆ナスシテ起タ于座ヲ以テ父母所生ノ身ヲ同スル佛果ニ  
也ナリ。故ニ云父母所生身即證大覺位ト此レハ是レ智眼所知・不スシテ亡セ情識ヲ莫<sup>四</sup>レ  
欲<sup>三</sup>フコト思<sup>二</sup>量セムト佛境界ノ之法ヲ矣。謂<sup>下</sup>フトモ顕家一乘信位ノ終心ニ撰<sup>中</sup>スト三賢  
十地ノ行上ヲ彼ハ約シテ智ニ談ス之ヲ未タ云ハ三密加持速疾顯ト故ニ父母所生身即證  
大覺位ノ義ハ實ニ闕所不<sup>ル</sup>書セ也ナリ。而ヲ立ツル十住心ヲ時キ從リ異生羝羊等・

(二三左)

至ルマテ極无自性心ニ判シテ人天乗教・聲聞緣覺・四種ノ大乘等ノ之優劣淺深ヲ立ツ  
自宗ヲ於最頂ニ然ル間諸宗ノ文義多ク出テ来ル。於テ其ノ諸教淺深有アリ或同或  
異ノ之義是レ皆ナ立教對判ノ常ノ習ヒ也ナリ。大乘教ニハ雖<sup>三</sup>トモ説<sup>二</sup>ト人法二空ノ義ヲ正  
クハ是レ可キ為ス法空教ト也ナリ。所以ハ者何ナレハ既ニ小乗教ノ之中ニ説ク人空ト於  
テ彼ノ人空ノ上ニ説法空ヲ故ニ人无我ノ義ハ大小同シク通スル也ナリ。又花嚴三重  
法界觀之中ノ真空觀絶相事理无尋觀等ハ是レ相<sup>レ</sup>ヒ當ル般若及ヒ

(二四右)

終教等ノ分齊ニ周偏含容觀・独リ限ル一乗教ノ義ニ也。雖<sup>トモ</sup>然ト三重法界觀ト者云  
ハ皆ナ是レ一乘一家ノ之談耳。慈覺大師釋云ク天台花嚴・唯理秘密・大日教王・  
事理俱密。云々是レ又如<sup>レ</sup>此ノ理秘密ハ雖<sup>トモ</sup>通スト天台花嚴・唯理秘密ノ義ニ於テハ  
身語二業ノ之事秘密ニ者諸教不<sup>ル</sup>コト談セ之ヲ明ケシ矣。然レハ者本不生ノ言ハ猶<sup>シ</sup>通  
ス顕家之義ニ秘宗ノ之本旨ハ以テ<sup>ヲ</sup>字<sup>ヲ</sup>字等ヲ為<sup>レ</sup>種子ト以出生不生ノ真理・

ヲ成<sup>レ</sup>就ス本尊ノ瑜伽ヲ乃

(二四左)

至指シテ心月輪ヲ為スル自性清淨心ト等・是レ秘密教ノ之宗本也ナリ。豈ニ非スト甚深  
超絶ノ義ニ乎但シ雖<sup>下</sup>トモ謂<sup>中</sup>フト天台花嚴・唯理秘密ト釋<sup>上</sup>シ給ト約スレハ花嚴本宗ニ法  
界緣起・大陀羅尼門・事々相即・一多无尋等ノ義ハ是レ宗家ノ之盛談ナリ也。故ニ  
判シテ花嚴・為ス事ノ一乘雖<sup>トモ</sup>然ト彼ハ於テ法界緣起具徳ニ約シテ智入ノ之照見ニ  
成ス事々相即ノ談也。望ムルニ真言ニ不<sup>四</sup>ス如<sup>三</sup>ニハ以テ方円等ノ之形ヲ顯シテ増<sup>一</sup>益  
息災等ノ之表相ヲ而結<sup>レ</sup>ヒ印ニ誦<sup>二</sup>スルカ明ニ・誠ニ是レ以下テ馴<sup>二</sup>タル凡夫ノ眼

(二五右)

耳テ之事相上ヲ連<sup>ツ</sup>續<sup>ケ</sup>テ佛功徳ニ直ニ融<sup>一</sup>入シテ法界ノ門ニ以テ父母所生之身口ヲ建<sup>一</sup>  
立ス如来秘密ノ之功徳・甚深甚深如下<sup>キハ</sup>云<sup>中</sup>カ行者・假<sup>タ</sup>使<sup>ヒ</sup>觀念ノ力ヲ微ナリトモ由<sup>カ</sup>  
此ノ印・及真言加持力ニ故ニ諸ノ供養<sup>〇</sup>皆<sup>ナ</sup>成<sup>テ</sup>真實一如法界ノ之中ニ廣大ノ供養  
ト諸ノ三摩地速疾ニ顯<sup>レ</sup>現ス等上ト。如<sup>レ</sup>此ノ功能其<sup>レ</sup>不<sup>ス</sup>一ニ・是<sup>レ</sup>則<sup>チ</sup>雖<sup>トモ</sup>觀念ノ  
力ヲ劣ナリト印言ノ之功用・大ナル力カ得<sup>ニ</sup>廣大ノ功徳ヲ諸ノ三摩地・速疾ニ現前スル  
也顕家ハ者一向ニ約ス觀智力ニ真言ハ兼テ運<sup>フ</sup>三業ノ行ヲ優

(二五左)

劣有<sup>三</sup>所<sup>二</sup>ロ何ノ<sup>トモ</sup>乏<sup>キ</sup>・而閣<sup>テ</sup>三密加持・五相成身・入我々入等ノ之成佛ヲ求メテ放  
光奇瑞ノ之化相ヲ欲スル為セムト即身成佛ト乎ヤ。三密相應等ノ義ハ諸教成佛門ノ之  
中ニ即<sup>チ</sup>所<sup>ロ</sup>不<sup>ル</sup>見<sup>ヘ</sup>也。然<sup>レ</sup>ハ真言教・雖<sup>トモ</sup>謂<sup>ト</sup>事理俱密ト事秘密・是<sup>レ</sup>諸教超勝  
ノ義ナリ也。真空絶相・事理无尋觀等・謂<sup>三</sup>テ相<sup>二</sup>レ<sup>ニ</sup>當<sup>ル</sup>ト淺教ノ義ニ不<sup>四</sup>可<sup>三</sup>為<sup>二</sup>三  
法界觀ノ之瑕<sup>ト</sup>ハ以テ前教ノ義ヲ欲<sup>下</sup>スルコト成<sup>一</sup>立スル彼ノ<sup>〇</sup>教ヲ之所<sup>一</sup>由<sup>上</sup>ト常途ノ性  
相ナリ也何ノ宗始メテ驚<sup>ム</sup>ヤ乎。汝ハ偏ニ執<sup>シ</sup>テ或異ノ義ヲノミ不<sup>四</sup>詳<sup>三</sup>サ有<sup>二</sup>ルコトヲ或ハ  
同

(二六右)

分深教ハ元ヨリ不立テ位ヲ以テ三業ノ位地等ヲ為スル建立門ト此レ亦常ノ談ナリ也。  
今我宗ハ即チ寄ニ乗ノ次位ニ多ク談ス其ノ義ヲ即チ現世證得歡喜地等如シ上ニ成スル  
カ三乗ハ即チ立證位ヲ於初地ニ故ヘ也ナリ。又論スル時劫ノ長短ヲ事對判シテ三乗ニ  
棟キラヘリ於三僧祇遠成之義ヲ一乘義ハ云ヒ初發心時便成正覺ト或ハ反云フ經无  
量劫等ト或又定ムルニ位ヲ立ルカ建立円融ノ二門ヲ故ニ時劫位地等對判不ス可カラ分  
明ナル故ニ寄シテ三乗教ノ位ニ顯ス頓成ノ旨也ナリ。於其ノ一々ノ位ニ亦タ含メリ円  
融

(二六左)

自在ノ之義意ヲ雖トモ涉入相應ノ義ハ元ヨリ秘密瑜伽宗ノ本躰ナリト前宗ノ盛談ナルカ  
故ニ不ス委セ之ヲ故ニ學者臨ム文ニ時キ謂ヲモヘリ我宗ノ地位差別セルカト之者モハ反テ迷  
フ涉入ノ義文ニ以テ涉入ヲ執スル本ト之者ハ又勞フ差別ノ義ニ一々ノ上ノ疑問源モト  
從リ此レ等ノ義起レリ也。即身成佛ノ義亦以テ如此ノ或ハ約シ機ニ或ハ約シ法ニ或  
ハ寄シ證位ニ或ハ依リ所修ノ行ニ或ハ云ヒ從凡入佛位ト或ハ云フ後十六生成正覺等ト  
毎ニ臨ム是等文ニ起ス上ノ一々ノ疑問ヲ其證拠ハ汝等ヲ見タリ所ノ勘フル文ニ配当ニ不  
ス違マアラ縦ヒ雖モ機ニ

(二七右)

分ニト大小二機ヲ於テ其ノ大小ノ機ノ中ニ又有ル幾ノ重々カ大機○即身頓證セハ可シ  
為ス機熟上根之者ト若シ如クナラ此ノ者ハ小乗教前ヘ釋迦菩薩以テ悉達太子父母所  
生ノ身ヲ直成シテ覺道ヲ有リ放光動地之瑞以テ可シ言フ即身成佛ト乎ヤ。汝上根  
上智大機ノ之人モ全ク不ス嫌ハ前世ノ機熟ヲ汝カ所ノ出ス小機ノ人モ若シ經ハハ生々ヲ  
○定メテ云ハシム大機即身成佛ト若シ爾ハ顯家ニ三僧祇後成佛ノ義ト有ラム何ノ差異カ  
乎ヤ。為メニ通セムカ此等ノ難當代ノ學窓ニ其ノ諍ヒ盛ニシテ也世々生

(二七左)

生々ヨリ以來カタ於テ顯密ノ二道ニ不レ成セ一分ノ值遇ヲ衆生始メテ遇テ此ノ教ニ可キ  
即身成佛ノ也ナリ。所以ハ何ナレハ者顯宗ノ龍女・善財等ノ現身成佛ハ依ヨルト前世  
見聞ノ生ニ云イフカ故ニ我宗ハ不ス然ラ一生一身ニ可カ成佛ス故ニ若シ謂ハハ前世ニ  
有ニリト成佛ノ業因何ソナラム顯宗ニ乎ヤ。問其ノ證拠如何ソ。答始メテ遇ヒ此教ニ  
起シ信ヲ立ツト行ヲ云フ文等甚多シ故ニ成ス此義ヲ不ス及出ス其ノ文證ヲ云々汝  
欲テ顯サムト法ノ深奧ヲ反テ不ス顧ニ墮ニセムコトヲ无因ノ邪宗ニ又以テ始メテ值遇シ信入  
スト云等ノ文ヲ云コト為スト其ノ證

(二八右)

拠ト還テ以タリ戲論ニ何ノ教カ无キ如ノ此文言不ス足ラ難破ニ也。於テ即身成佛ニ  
一生隔生等義ハ上ニ粗成シ之ヲ畢ヌ。今試ミニ付テ一文ニ重テ會シテ相違ノ義ヲ解カム  
汝カ疑滯ヲ大日經疏云發如初發心時ノ一切ノ功德即チ与如来ト等シ從リ此レ以  
後經テ无量阿僧祇劫ヲ於テ一念ノ中ニ恒ニ殊ニ進轉轉ウタタ深轉ウタタ廣クシテ不可思議  
ナリ。以此ノ義ヲ故ニ名テ為秘密藏ノ中ノ无作ノ功德ト也。云々今ノ文ノ次キ上ニ釋シテ  
菩薩ノ律義ヲ云ク雖トモ從リ最初發心乃至四十二地階次不同ナリト一時ニ普ク遍シテ  
法界ニ發起ス无

(二八左)

作ノ根則チ与如来ト更ニ无シ増減ノ之異。云々此以テ文ヲ即チ學者真言ニ為ル四十  
二地建立ノ證拠ト歟。既ニ言フ初發心時如来齊等ト可ヘシ為ス顯成ノ義ト而モ又言  
テ經テ无量劫ト以次ニ言フ於一念中恒殊進轉深廣ト其ノ義誠ニ甚深ナリ也。以テ无量  
劫ヲ於テ一念ノ中ニ云フ轉深轉廣ト是レ即チ无作ノ中ノ漸々初後常ニ齊等ナリ也。  
四十二地階次不同ノ義ハ三乘建立門ノ之説ナリ也。初後ノ淺深ハ終ニ付テ衆生ノ分  
別ニ建立ス之ヲ如下云イヒ一時普遍更无増減云カ於一念中恒殊



(二九右)

進<sup>上</sup>ト者ハ約スル无作ノ中ノ義ニ也ナリ。故ニ不ス壞セ三乘行布之次位ヲ於テ一念无作ノ行ノ中ニ有ル轉深廣ノ義也ナリ。譬ヘハ王太子ハ雖トモ幼年ナリト即位ニ之ノ時百官皆ナ以相ヒ從フ。太子更ニ雖トモ不スト知ラ吾レ居ト王位ニ。國務盡<sup>コト</sup>、ク属シテ於王ニ。万民仰<sup>キ</sup>之ヲ四海貴フ之ヲ。漸漸ニ長大ナル事ハ是レ於王位一念ノ中ニ恒ニ殊ニ進テ而如<sup>下</sup>シ作スコト。國務轉ウタ、廣<sup>上</sup>更ニ非<sup>下</sup>ス大臣公卿ノ經ヘ昇リテ嗣<sup>キ</sup>王位<sup>ヲ</sup>宰<sup>中</sup>トルニ。國務上<sup>上</sup>也如<sup>キ</sup>今ノ文ノ者ハ即チ從リ最初一念如シ王々ト増進スルカ故ニ自リ初メ至マテ後二百官同<sup>キ</sup>可シ敬<sup>レ</sup>重ス之ヲ。約スルハ王ノ位ノ之<sup>ニ</sup>更ニ无<sup>シ</sup>二念<sup>一</sup>別望スレハ修

(二九左)

進ノ義ニ又於テ藝能等ニ非无<sup>キ</sup>ニ不同。汝若シ以テ一念不生ノ智印ヲ横ニ印セハ十方ノ地獄天堂悉ク莊リ内證ノ德ヲ堅ニ印セハ三際ヲ越タル三時ヲ如來ノ之日ノ非古非今ノ舊來已ニ成シ畢ラム如<sup>下</sup>キ新成妙覺ノ尊有<sup>中</sup>ルカ舊來成佛之号上<sup>上</sup>者ハ新成ハ望ムル凡情妄盡ノ之邊ニ談舊成ハ約スル本有三密顯得ノ之義ニ說ナリ也。若シ本有三密无<sup>ク</sup>ハ細妄加持ノ印言豈ニ有ラム微垢乎ヤ。謂ク有<sup>ル</sup>カ如來大悲方便ノ加持力故ニ行者巧<sup>ミ</sup>ニ廻<sup>レ</sup>々轉<sup>ニ</sup>シテ不可說々々々ノ法佛ノ三密ヲ撰<sup>レ</sup>取<sup>レ</sup>以テ充滿ス己レカ二業ニ故ニ皆ナ

(三〇右)

得<sup>ル</sup>佛果三密ノ功德ニ也ナリ。汝於テ前後ニ不ス雜<sup>レ</sup>起<sup>セ</sup>妄心<sup>ヲ</sup>發<sup>レ</sup>起<sup>シ</sup>テ随分ノ信心ヲ住<sup>シ</sup>テ三密三平等入我々入等ノ觀ニ二念不スハ現前<sup>ニ</sup>者豈ニ是レ不ラム名ケ佛ト乎ヤ。如ク汝カ三密平等ナルカ本尊三密モ亦タ復タ如シ是ノ同一縁相也ナリ。如ク本尊ト与汝カ身ト三密平等ナルカ已成未成ノ一切ノ諸佛ノ三平等モ亦タ如シ是ノ又非ス唯諸佛ノミ一切衆生本来自性理ト与汝及ヒ諸佛ト平等ニシテ无<sup>シ</sup>差異故ニ秘藏記云<sup>下</sup>ヒ已成ノ如來從<sup>リ</sup>因向<sup>フ</sup>果ニ於テ其ノ中間ニ所修スル功德及ヒ淨煩惱・成正覺ノ後チ

(三〇左)

度スル衆生等ノ功德ヲ入<sup>中</sup>ルト我身上ニ又云フ入我々入ノ故ニ諸佛三無數劫ノ中ニ所修集スル功德具足ス我身ニ等<sup>上</sup>ト委クハ如シ上ニ引カ既ニ一切如來所修ノ功德淨煩惱成正覺乃至三無數劫所集功德三密平等ノ故ニ入我々入ノ故ニ具足スト我身ニ云々言<sup>下</sup>ハ、如ノ此ノ三密ノ行ハ○我等境界ニ是レ上根上智ノ所行上ナリ當ニ知ル破<sup>レ</sup>滅シテ三密ノ行ヲ令<sup>下</sup>シテ如來秘密ノ教ヲ世ニ不<sup>中</sup>サラ流通セズ斷滅スルニ三密ノ佛子ヲ乎ヤ。大日覺王何ソ以テ即身成佛ノ教ヲ欲セ為メニ從身流出ノ菩薩ノ超スル八祖ニ上根上智即身

(三一右)

成佛ノ機ハ又在ルヤ何ノ處ニカ乎ヤ淨煩惱・成正覺・僧祇所集ノ功德全ニ云ハ、非スト我等分ニ者上ノ三密平等入我々入等ノ義ハ實ニ非スト汝カ分ニ乎ヤ。然者當今末世三密ノ行虚行ナラム者モヲヤ哉。但シ法佛ノ三密ト者云ハ融シテ汝カ三業等ヲ為スル法佛ノ三密トハ也。若シ不スハ遍セ汝カ三業ニ法佛ノ三密有<sup>下</sup>ラム不<sup>レ</sup>遍衆生ニ三業ニ之失上又法佛ノ三密ハ約スレハ時ニ超タル三時ヲ因ナルカ故ニ依テ此ノ三密教ニ生シ信心ヲ專スル修行ヲ汝カ一座ノ行法ハ々々佛三密・法爾ニ即チ汝カ修行ノ時也。自<sup>レ</sup>己ノ身心惣テ是レ法佛ノ

(三一左)

三密ナルカ故ニ佛ニ无<sup>キ</sup>カ自他性故ニ汝カ三業不<sup>ス</sup>出テ法佛ノ三密ヲ汝ト与本尊ト无<sup>カ</sup>自他性故ニ而<sup>レ</sup>ハ魔シテ己<sup>ヲ</sup>住セハ本尊ノ三摩地ニ不<sup>ス</sup>移サ一念<sup>ヲ</sup>即チ是レ佛ナラム也。於テ佛ニ有ラム淨煩惱・成正覺ノ義不<sup>シ</sup>足ヲ為スルニ奇ト。故ニ云<sup>下</sup>フ諸佛万徳圓滿眷属圍繞シタマハハ我モ亦万徳圓滿眷属圍繞<sup>上</sup>スト請フ閑靜思惟セヨ以テ率爾ノ心行ヲ莫<sup>レ</sup>疑フコト秘密ノ深奥ヲ矣。汝ト与本尊ト譬ヘハ如シ因陀羅網ノ故ニ三密三平等入我々入等ノ義因果二位初後終ニ无<sup>シ</sup>差異也。不成已成舊來如シ是ノ若シ

(三二右)

汝チ行法以後・起ト妄心ヲ故ニ何ソ謂ハムト成佛・スト云ハ者成佛ノ言ハ元ヨリ約ス法佛ノ三密ニ唯タ妙智隨順シテ所入ル也・ナリ不<sup>四</sup>ス可<sup>三</sup>カラ以テ分別ノ狂心ヲ對ニ酌成不成ノ義ヲ若シ情謂ノ分別未タ蕩チ者ハ終日雖ト説ト即身放光ノ之旨ヲ彌ヨ増サム迷執ヲ何ヲ以<sup>二</sup>故ニ迷執ノ論談・重ナルカ座ヲ故ニ瑜伽觀行・成佛ノ軌則ハ皆ナ約ス法本不生ノ極際ニ也・雖トモ為<sup>二</sup>重言為<sup>二</sup>遮ニ汝之疑心ヲ盡シテ諸篇ヲ廣ク示留メテ意ヲ无獻・フコト矣・若シ約レハ三密平等一念不生ノ智印ニ汝チ終ニ以テ与佛ト齊等ナリ豈ニ即身ニ非ス成佛スルニ乎ヤ・定メテ

(三二左)

知ヌ諸天モ敬重シ之魔鬼モ恐怖スラム也・現ニ見ルニ有リ持戒ノ德・積メル練行ノ之功・之僧徒・於テ其ノ効驗ニ有ルハ不思議ノ境界即チ徐ク開發スル佛德ヲ也・正覺ノ之言ハ名ク智ニ<sup>59</sup>○不思議ト乎ヤ・只惟ヘシ以テ法佛ノ三密・莊行者ノ身心ニ此レ則チ即身頓成ノ之印法也ナリ・即身成佛之四字・本意在リ之ニ也・於テ其ノ中ニ有ルハ種種ノ不同是レ機ノ差別ナリ也・若シ約セハ世々ニ又機ニ不ス可<sup>二</sup>有ル優劣然レハ則チ即身頓成不思議ノ事ト云ハ者今感得シ兩部大法ヲ受<sup>一</sup>得スル受識灌頂ヲ也・先ツ云<sup>下</sup>ヒ灌頂大阿闍梨ト者ハ阿闍

(三二右)

梨ノ自身ヲ想ニ<sup>二</sup>へ毘盧遮那・大日如来ハ是レ以<sup>二</sup>此ノ大悲胎藏ノ阿闍梨ナルヲ故<sup>上</sup>ニト又普賢金剛サタ他受用等ト者云ハ直指テ灌頂阿闍梨・為ス大日如来ノ他受用身ト又汝行法前方便ニ我身・觀スル金剛サタ等ハ為<sup>下</sup>セム勝解作意ニシテ而非<sup>中</sup>ストヤ眞實作意ニ依<sup>二</sup>小乘三乘等ニ勝解作意ト者云ハ只タ如シ世間ノ有良増<sup>60</sup>シ事ノ乃故ニ四无量心定等ハ雖トモ作<sup>二</sup>勝解作意ヲ實ニ謂イヘリ无シト拔苦与樂之功實教大乘已上ハ眞實作意ナルカ故ニ此ヲ曰イヒ无極大悲ト又曰イフ同躰ノ大悲ト也・十遍處定等

(三三左)

又如シ此・雖トモ思惟スト色遍處ノ義ヲ小乘三乘等ノ意ハ<sup>61</sup>○无シ遍處ノ義約レハ實教大乘已上ニ亦タ皆ナ眞實作意ナリ也色性本<sup>一</sup>自ヨリ遍スルカ法界ニ故ニ无<sup>下</sup>キ一法トシテ而不<sup>レ</sup>遍<sup>セ</sup>法界ニ法上也・凡夫ハ顛倒シテ不<sup>レ</sup>見之ヲ以テ定力ヲ於テ遍法界ノ法ニ<sup>62</sup>○是レ稱性ノ之德・法爾ニ具大小ヲ法爾一多无導ナルカ故ニ稱<sup>二</sup>彼ノ性ニ而定力・自ラ現ス・非神通反化等ノ所作ニ也・尺シテ一乘託事門ノ義ヲ云ク・見<sup>二</sup>此花葉・即是レ見<sup>レ</sup>ナリ於<sup>二</sup>无盡法界・非<sup>三</sup>是<sup>レ</sup>託<sup>シテ</sup>此ニ別ニ有<sup>二</sup>ルニ所表・云々无盡法界ト者云ハ即チ是<sup>レ</sup>事々无導ナリ云々・非是託

(三三右)

此別有所表ト者云ハ棟<sup>下</sup>フ餘教ノ以テ事ヲ表スルニ義<sup>上</sup>ヲ如シ華表シ忍辱・室・表スル慈悲ヲ等<sup>上</sup>ノ今ハ明<sup>下</sup>ス一事即チ法・即チ人・即チ依・即チ正・具<sup>中</sup>スルコトヲ无盡ノ德<sup>上</sup>ヲ從リ无盡ノ因人即<sup>63</sup>所ナルカ生スル故ニ<sup>二</sup>更ニ問ヘ<sup>一</sup>取意ヲ<sup>三</sup>一乘教ノ意ハ於<sup>二</sup>一花乃至一紙ノ上ニ具スルカ人法依正等・无盡法界ノ義・故ニ於<sup>二</sup>一花一紙ノ上ニ具<sup>一</sup>足ス生佛・依正・因果二位・无盡ノ義<sup>上</sup>然レハ者見ルヲ一花一紙・即チ為<sup>三</sup>スト見<sup>二</sup>无盡法界・云也ナリ・於テ此ノ一花一紙カ上ニ信智纔ニ轉スル時キ以テ无盡法界ヲ為ス境界ト也・此レ等ハ即チ非<sup>四</sup>如<sup>三</sup>キニハ謂<sup>二</sup>フカ彼ノ小乘三乘等ノ勝解作意・神力反

(三四左)

作ノ之所口成ス等ト法々自性皆ナ如シ是<sup>上</sup>然レハ則チ<sup>ワツカニ</sup>小作<sup>下</sup>スニ如<sup>二</sup>此ノ觀念<sup>上</sup>ヲ不<sup>レ</sup>論セ成<sup>64</sup>○其得益不<sup>レ</sup>ル空<sup>上</sup>カラ也ナリ・何以ノ故ニ一乘ノ信智・纔ニ起<sup>二</sup>ルニ三摩地ノ心所俱起シテ等ク持シテ心々所ヲ稱テ法・自性ニ轉スル時キ因果二位无邊ノ德用・歴然トシテ浮フ稱性ノ信智ニ豈ニ論セムヤ成不成ヲ能々思ヘ之ヲ・況ヤ於我宗秘密ノ教ニ哉ヤ<sup>下</sup>令<sup>下</sup>シテ汝ハ即チ金薩・阿闍梨ハ即チ遮那ノ身ト忝クモ授<sup>中</sup>ケ覺王印璽<sup>上</sup>ヲ歛テ尚<sup>上</sup>有リ餘<sup>上</sup>リ何ソ汝等<sup>上</sup>以テ即身頓成ノ義ヲ強<sup>上</sup>誹<sup>上</sup>撥<sup>上</sup>シテ為スル非スト我分ニ乎ヤ・花嚴李長者釋シテ



新經ノ印璽ノ文ヲ云ク・

(三五右)

王ヲ為シ璽ト銅鐵本ヲ為ス印ト如シ龍樹等ノ符印ノ也。<sup>取意是レ即指我宗ノ印契ヲ歟</sup>  
汝既ニ傳ヘテ遮那金薩・龍猛・龍智等ノ印璽ヲ歷タル幾ノ師資ヲカ金薩・龍猛・龍智・乃  
至吾カ高祖ハ・為セム即身成佛ノ之人トヤ將タ彼小機ニシテ而為下セム經ル生々ヲ機トヤ  
如何・有人有リ言ニ<sup>二</sup>イヘルコト高祖ハ是レ權化ノ人・往古如来也ナリ・大師自ラ記シタマヘ  
ルヲ第三地位ト哉ヤ彼ノ高祖ノ記ヲ為セム實トヤ彼ノ胸憶ノ之釈ヲ為ム實トヤ聊シ不ル似  
ニ汝等カ境界ニ者モノヲハ高ク推テ稱ス權ト佛果不思議ノ境界ハ非スト我等カ分ニ<sup>ハケミ</sup>励<sup>一</sup>勘  
フ此レ何ノ所<sup>一</sup>

(三五左)

用ソ哉・只於テ實類ノ凡夫ニ者成<sup>一五</sup>立シテ不<sup>四</sup>スト可有ル佛法ノ巨益塞テ於勝進ノ  
路ヲ而欲スルハ作ラムト末代ニ汝カ營ミ也ナリ可悲ム々々持スル王宣ヲ者モノヲハ百  
官悉ク敬フ之況ヤ雖トモ為リト百姓下賤ノ者授下ケ讓ハ国位ヲ之印璽ヲ持セム王印ヲ  
者ヲハ誰ノ万民カ不敬重セトモ未作サ国務ヲ四海在リ掌ニ汝得タリ成佛ノ印璽ヲ  
覺王ノ境界在掌ニ也ナリ・但シ未<sup>下</sup>タ成<sup>中</sup>セ<sup>上</sup>怜アハレミ民ヲ恤メクム物ヲ德ヲ云<sup>二五</sup>トモ不<sup>四</sup>ス  
ト能成スコト王ノ政セイ道ヲ不可言フ非ストハ国王ニ而モ世間王印ハ失セハ之ヲ不シ名ケ  
王ト汝若相<sup>一</sup>應シテ法身如来三密所修之悲智願行等ト毫

(二六右)

釐モ似ハ如来ニ者与三世ノ佛ト住スルカ同一境界ニ故ニ所ノ印スル智鉢ハ无ク内外中  
間モ无シ三世去来今之不同モ与一切ノ佛ト同一性此ノ不生ノ性ニハ无ク出入モ  
无シ古今モ也・以テノ同シ給ヲ此性ニ故ニ云フ諸佛ト汝チ又同セハ此ニ者為セム何ノ色ノ  
人トヤ為人トヤ为天トヤ自ヨリハ非ス号スルニ佛ト更ニ有ムヤ何ノ稱但シ雖<sup>下</sup>トモ法佛ノ  
三密ニハ无<sup>中</sup>ト始末汝チ流轉門ノ中ニ障習未タ亡セ故ニ行法ノ時齊等ナレトモ佛ト出堂

ノ時・見ル凡聖ノ別ヲ依テ此ニ於テ法佛ノ三密ノ中ニ漸々ニ起ス修治ノ用ヲ終ニ還テ顯ス  
汝カ真實相應ノ一座ノ行法ヲ之外カ更ニ別ニ不ス

(二六左)

可カラ有ル顯得ノ之實成故ニ真言ノ成佛ハ无因果ノ別牀・初後ノ淺深也・因果ノ別執  
ハ終ニ属ス汝等カ之情見ニ因テ茲ニ為メニ我等カ寄シテ三乘ノ位地ニ立テ因果二位ヲ示ス  
初後相即等ノ之義ヲ也ナリ・汝終ニ見テ凡聖ノ異ヲ凡ノ外ニ求メテ佛ヲ有カ所得故ニ有  
カ取捨故ニ未タ可カ入ル金剛一乘ノ之信流ニ況ヤ有成佛ノ義乎・問我モ作ス六大  
无尋四曼不離三密加持ノ行ヲ時キ其ノ一印一言等何ソ无<sup>下</sup>ラム同スル本尊ノ境界ニ之  
分上只タ・幾度所<sup>イタヒモ</sup>疑フ出テ道場ヲ畢レハ貪瞋・轉起リ・受縛如シ故モトノ不ハ得解<sup>一</sup>

(二七右)

脱スルコトヲ之ヲ何ソ我ヲ稱セム佛ト我レ既ニ有<sup>下</sup>リ起ス此ノ退心ヲ之疑<sup>上</sup>ヒ是<sup>一</sup>又如ナラハ所  
ノ示一乘託事等ノ義<sup>上</sup>ノ者顯密・有ムト何ノ差異之疑<sup>上</sup>ヒ是<sup>一</sup>於テ数重ノ難破ニ一々ニ  
有リ此ニ一條ノ疑<sup>上</sup>ヒ所口未タ晴也ナリ如何・答如シ上ニ答スルカ一タヒ以テ此ノ不生ノ智  
印ヲ々スルニ小スコシキモ与此ト相應セハ設ヒ一往雖トモ起スト貪瞋癡等ノ意ヲ約スレハ起ス  
ニ彼ノ不生智ヲ終ニ可シ為ス成佛ト元ヨリ約シテ六大四曼五相三密等ノ之行ニ判  
成佛ノ義ヲ故ニ此ノ法佛三密ハ已成未成同一性ノ故ニ汝カ所ノ出ス大機顯得ノ即  
身成佛モ入ル此三密平等

(二七左)

一性等ノ義ニ也汝モ悟入セハ此三平等一性ノ義ニ不生ノ性ニハ无シ出入等モ如シ上ニ  
成スルカ・本来法本不生ノ故ニ・本来六大无尋故・本来四曼不離故ニ・本来三密平等  
ノ故ニ・纔ニ住スルニ入我々入ノ觀念ニ与本尊ト居ス同位ニ指テ之ヲ云フ即身ニ成佛ト  
也ナリ問聞クニ如ノ上ノ諸説ヲ皆ナレ加持成佛ノ分齊ニシテ更ニ非ス顯得成佛ノ義ニ如  
何・答汝聞テ三種ノ名言・堅ク執ス差別・此ノ三種終ニ不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>相離ス也ナリ即身

義本法以テハ從六大无尋至中重々帝網ノ句ニ配シ即身ノ二字ニ從

(三八右)

法然具足至マテハ円鏡力故ニ配ス成佛ノ二字ニ又タ依テ三種ノ即身義ニ配スルニ之ヲ以ハ初ノ二頌四句ヲ為シ加持ノ成佛ト從リ法然具足至中各具五智ノ句ニ為シ理具ノ成佛ト以テハ円鏡力故ノ一句ヲ配ス顯得ノ成佛ニ若シ以テ即身二字之ノ釈ヲ配スル加持ノ成佛ニ之時キ成佛ノ之兩字轉スル何レノ句ニカ可シ知シル三種ノ成佛ハ一法一時トシテ无捨離スル時也ナリ依テ三密加持ニ何ノ法ヲカ顯得スル即チ法然ニ所ノ具足スル心数心王也ナリ是レ即チ因テ円鏡力ニ如ク實ノ覺知スルカ故ニ謂ク自他三密无シ有コト邊際

(三八左)

名テ之ヲ大トス也具足シテ不ヲ缺曰フ円ト實智高ク懸テ万像顯現ス鏡ノ之喩ナリ也何ヲ以テカ独リ円鏡智力爾等皆謂法界性智ト者云ハ三密差別ノ数ス過タルヲ刹塵ニ名ク法界ノ諸法所依ナルカ故ニ曰フ鉢ト法然不壞ノ故ニ為ス性ト決斷分明ナルカ故ニ為ス智ト然レハ則チ以テ法界智ヲ為ス三密ノ鉢ト也平等性智彼此同ノ故ニ妙觀察智ハ邪正不ス謬マラ成所作智ハ二利ノ應化妙業必ス遂ケ成ス故ニ法界性智ト者云ハ三密刹塵ノ鉢ナリ也依テ大円鏡智力ニ此ノ自他ノ三密顯現ス故ニ三密ノ加持ニ速疾ニ

(三九右)

顯發スルコトハ円鏡力ノ故ナリ也即身義ニ以テ円鏡力故ノ句云フ出スト成佛ノ所由ユヘヲ者深ク有ル由シ也彼ノ中臺自性法身ノ之二利ノ應用モ是レ成所作智ノ妙業ナリ邪正不ス謬ラ妙觀察智ノ力用ナルベシ也設ヒ雖トモ外部ノ天童ナリト三密ノ鉢ハ是レ法界智ニ三密自他ノ相ハ是レ円鏡智力ノ所成スル也ナリ各具五智ノ之義互ニ准知セヨ之ヲ无キ有コト増減也ナリ云フ法應化等ノ之四種身從リ一法門出現シ中ト一身

ノ所具ト者ハ即チ是等ノ意ナリ也三種成佛亦復タ如シ此ノ約シテ所ニ望ムル雖トモ分ニ三種ノ

(三九左)

別若シ缺セハ一門ヲ三不ス可ラ成ス也今我カ所ノ立スル即身成佛ノ之義ハ依テ法佛ノ三密加持ノ力ニ約シテ本尊ト与行者ト重々帝網ナル義ニ於テ越タル三時ヲ智眼ノ前ニ成立ス之ヲ汝ハ一向望メテ凡眼ニ疑フ真ノ正覺ヲ問答既ニ參差セリ論決更ニ无キ日也ナリ問前後ニ多ク以テ難トモ聞ト此說ヲ於我等カ之分ニ出テ道場ヲ後チ尚シ起サ妄念ヲ者ハ成佛ノ言終ニ似タリ无キニ詮表如何答我又聞クニ汝等カ之說真言ノ即身成佛ノ義似タリ无ニ詮表所一以ハ云一何ナル者ハ為メニ顯カカ真言一家ノ即身頓成ノ深旨ヲ求ルニ其ノ人證ヲ或ハ出ス

(四〇右)

顯家龍女善財等是レ先マツ何ノ謂ソ乎ヤ閣テ金薩龍猛龍智等ヲ顯家ノ成佛ヲ為ス人證ト如何イカン金薩龍猛等ハ於劣機ニ雖トモ成三密五相ノ行ヲ不スト即身頓成之機ニハ云者イハハ我宗ノ上根上智即身成佛ノ之機ハ欲セム誰トカ乎ヤ有人高祖大師以テ現スルヲ大日如来ノ身ヲ為ス其人證ト高祖ハ是レ為セム超ト過薩埵已下七祖ニ乎ヤ又如クナラ汝カ疑フ者ハ既ニ復ス本身ニ不ス可ラ為ス即身成佛ノ之證ト又上ニ所ノ成スル以テ三密加持四曼不離等ノ義即身成佛ノ義都世云フ然レハ即身成佛ノ義ハ非ス奉一

(四〇左)

為メニ八祖等ノ況ヤ亦タ非ス為ニ我ラ等カ而モ法ハ持シテ機ニ説ク之ヲ若シ无クハ其機為ニカ何ノ所益ノ説ク即身成佛ノ義ヲ乎ヤ故ニ聞クニ汝カ説ヲ似タリ无キニ詮表若求メ其人證ヲ者何ソ不ル出サ金剛サタヲ乎ヤ故ニ雜問答云ク問既聞ニツ文證ヲ若如クナラハ是者ハ誰人カ修一行シテ此三摩地法即身成佛スル指ス二人ヲ是レ誰トカセムヤ耶

答其人数多ナレトモ、暫ク指シテ金剛サタヲ為ス其ノ人ト耳。既ニ云フ現世證得歎喜地後十六生成正覺ト居セム薩埵位ニ者ノ豈ニ現世ニ不ラムヤ成セ正覺ヲ雖トモ謂トモ彼ノ善財ハ於シテ賢首佛國ニ證ニスト果海一ヲ言フニハ其ノ形ヲ只タ

(四一右)

是レ小童ノ質スカタナリ也。雖トモ不スト見ミ賢首佛國ノ之正覺ヲ信受スルカ教ヲ故ニ以テ之ヲ證ト。何ソ我宗ノ後十六生成正覺ノ之正覺ノ言至テ金薩ニ始メテ成シテ疑ヲ不ル出サ之ヲ〇所以ハハ偏ニ由テ現身成佛ノ語ハニ執スルカ眼耳等之轉變ヲ故ヘナリ也。有人善財正覺有リ謂フコト无シト劫国名号等真ノ正覺ノ前ニ有ラム何ノ劫国名号乎。ヤ是レ偏ニ聞モノハ佛ト云名ヲ唯タ、留ムル意ヲ於化身故ヘリ也。成佛ノ建立種々不同ナルコト上ニ出シ之ヲ畢ヌ。謂ク以テ如實知自心ヲ成スル正覺等ハ。是レ猶ヲ於テ顯家一念不生等ノ處ニ似タリト立ルニ成佛ノ義ヲ云ハ於テ三密加

(四一左)

持速疾顯ノ義ニ諸教實闕テ而所不ル書セ也。爾レハ修行セム三密加持教ヲ者ノハ設ヒ雖トモ下劣ナリト對セハ顯家修行人ニ可シ為ス勝タリト何ヲ以テ故ニ以テ法佛ノ三密ヲ莊ルカ父母所生三業ヲ故ニ況於テ祖々上根上智ノ人ニ何ソ即身成佛ノ之義乎。開遺之都云フ。乎又我等カ一座ノ行法ニ猶シ座々至金剛拳ノ位ニ五秘密瑜伽行相乃至後十六生正覺等ノ義更説之ヲ上ニ成シ了ヌ。汝以テ煩惱不ルヲ斷セ佛名遺之都云フ執心大ニ違ス真言ノ宗躰ニ也。上ノ即身義ノ煩惱不斷ノ義廣ク説ケリ之ヲ顯家一乘以テ煩惱〇必之毛

(四二右)

不ス規模トセ故ニ傳聞ク天台ニハ立ツ性惑ヲ華嚴ニハ於テ一ノ瞋煩惱ニ以テ見ルヲ百千障導法門ヲ為ス斷惑ト況ヤ真言教ニハ云欲清淨句是菩薩愛清淨句是菩薩等ト五塵六欲之境界唯タ、非ス不ルノミニ成セ過患ヲ反テ莊佛徳ヲ成スル菩薩位也。ナリ世間ノ欲ト者云ハ欲求スル財色也。ナリ。又佛法ノ中ノ上求菩提下化衆生ノ之欲モ同ク

是レ欲樂ヲ心也ナリ。只迷悟之異耳。但シ我元ヨリ強出堂以後以テ執着財色之者ヲ不ス云云ハ欲セムト即身成佛ノ人ト於テ道場ニ發シテ隨分ノ純信ヲ取ル住スル本尊ノ三昧

(四二左)

地ニ者上ヲ也。雖トモ一念發起セム此心ヲ者ハ一生一身之中ニ二念三念乃至行住坐臥与真言秘教ト相應シテ隨分ニ勤与道ト合セム者ノ何ソ必シモ云ハムヤ无シト之レ乎。汝ハ強チニ誹撥ス此ノ義ヲ我ハ殊ニ成立ス此ノ義ヲ故ニ数重難破雖トモ似タリト有ルニ重言ノ憚リ且成ニルニ如ノ上ノ義ヲ顯得ノ之義通初後二心ニ隔生一生之相違自ラ亦タ會シナム。又可シト同ス顯宗ニ云フ疑ヒ如シ上ニ成カ汝欲下フ令シテ顯密ヲ天地ニ差別上セ之執心雖トモ見聞スト所同スル之經論ノ説上ヲ隨テ見ルニ求メ相違ノ文ヲ隨聞クニ増ス執情ノ色ヲ知シ以テ血ヲ濯ムカ血ヲ何ノ時カ淨カラム。円融自

(四三右)

在ノ之徳用ノ開示悟入ノ之佛知見同セハ者何ソ為ラム我宗ノ之瑕キス彼ハ纔ニ於テ意地ニ立ツ行ヲ我宗ハ成ス三密ノ行ヲ故ニ現ニ汝見ヨ我國雖トモ為リト小国佛法東漸シテ七百餘歳大藏ノ經本六千餘卷諸宗ノ章疏八宗餘家流行シテ一天ニ学者並フ肩ヲ而上カミ自リ一人下モ至ルマデ万民ニ祈求スル現当二世速疾ノ之益ヲ時キ先ツ崇敬セリ我宗ヲ。而末代小国軌儀是レ疎カニ信心亦タ微ニシテ戒行モ不ス全カラ練行功少キカ故ニ疑ラクハ可シ謂三有ニムト何ノ所益カ雖トモ然ト甘雨潤シ四海誚灾滿ツ万戸ニ嗚呼ア憑シキカ

(四三左)

哉ナヤ内ニ有リ本始而覺外ニ具足スルカ三密加持ヲ故ニ我迷醉之窓ノ内ニ靈驗尚ヲ揭焉ナリ也。況ヤ於テ持戒精進之者ニ乎ヤ。建仁二年之比先師上人紀州在国之間タ親里ニ有リ一人ノ病者忽ニ絶入シテ其息止テ稍ヤ久シ上人以テ誠心ヲ於シテ佛





言ニハ・<sup>一</sup><sup>二</sup>上ニ加テ空點・云フ<sup>三</sup>ヲ<sup>四</sup>𑖀𑖄𑖅𑖆𑖇𑖈者ト云ハ金剛也。譬彼ノ世間ノ戀、心之ノ堅固ナルニ而<sup>五</sup><sup>六</sup>上ニ打テ空點・讀ヨマセタルハ<sup>七</sup><sup>八</sup>𑖀𑖄𑖅𑖆𑖇𑖈者翻シテ凡

夫執着ノ之戀ニ表ス虚空无垢大菩提心ノ之戀ノ義ニシヤクスウムノハムニマク者ト云  
 鉤召引入縛シテ而令ムル歡喜セナリ。向テ上ニ鉤ノ召シ下クタシテ諸佛ノ功德ヲ而授ケ  
 衆生ニ向テハ下ニ哀ミテ一切衆生ヲ鉤ツリ寄ヨセテ而令シム入レ佛法ニ也。更思フニ如ノ  
 此ノ義凡夫愛執ノ之前ハ戀慕ノ之餘アマリニ身命猶捨ツ況ガ佛為メニ我等捨テ、頭目  
 髓腦ヲ円満シタマヘリ一切智・一切種智ヲ聊モ疎ヲロソカナル事ハ不サル坐マシマサ也ナリ。  
 云々誠聴ク此ノ語ヲ我等又云一何シテカカ輕シテ於身命ヲ於テ佛境界ニ致サム愛樂戀慕  
 ノ之志シヲ而ヲ善品身ニ少スクナケレハ捨テモ身命ヲ何一為イカ、セム又齡ヒ空一ク

衰レハ而松石ノ之栖<sub>ニ</sub>曉<sub>ニ</sub>嵐<sub>ニ</sub>冷ナシ焉<sub>一</sub>・病侵セハ身<sub>ヲ</sub>而薜蘿ノ之脈<sub>ヲ</sub>夜<sub>ニ</sub>霜<sub>ニ</sub>寒シ矣<sub>一</sub>・  
高雄ノ口決<sub>ニ</sub>云ク・寂室<sub>ヲ</sub>名ク蘭若<sub>ト</sub>又我内心<sub>ヲ</sub>号蘭若<sub>ト</sub>・高祖ノ之遺<sub>ニ</sub>訓<sub>ニ</sub>遙カニ憐ミタマ  
フ於我等<sub>ヲ</sub>也<sub>ナリ</sub>・不<sub>レ</sub>如シカ離五塵六欲ノ之慣聞<sub>ヲ</sub>居シテ内心寂靜ノ之蘭若<sub>ニ</sub>專セハ  
三密平等入我々我入之觀智<sub>ヲ</sub>定メテ知ヌ等クセム志<sub>ヲ</sub>於佛<sub>ニ</sub>諸佛<sub>モ</sub>豈<sub>ニ</sub>不<sub>三</sub>ラム円<sub>ニ</sub>満  
シタマハ无数劫ノ中<sub>ニ</sub>之所修之本懷<sub>ヲ</sub>乎<sub>一</sub>・有ル信心衆生ハ敬愛コト諸佛<sub>ヲ</sub>孝子ノ如シ於  
スルカ父母<sub>ニ</sub>摂護コト衆生<sub>ヲ</sub>勝タリ於男女愛執ノ之情<sub>ニ</sub>應起<sub>ナサケニモ</sub>

清淨欲志求无上道ト下者云ハ此等ノ之謂ヒ也ナリ。而愛樂佛法之心尚一疎カニ利益衆生ノ之願・未タ堅カラ。日月ハ如クシテ馳ルカ短命影傾フキシタリ古ノ人今ハ不ス見ハ今ノ人何ソ久シカラム哉。和尚ノ云ク人ハ皆ナ云ク无端世ノ中アチケナキ左トテモカクテモ右可シ在アリヌ云々我力心ハ不ス爾无端キ世ノ中ニ可ルキ有ル様ニテ而有ラムト云々。誠ニ志シ高ク望ミ佛境ニ慈ミ廣ク覆テ生界ニ所作ノ之行・清淨ニシテ可ル有ル様ニテ而在ラハ無キ端キ世ノ中ニ

来世之報有<sup>ル</sup>憑<sup>ニ</sup>也<sup>ナリ</sup>・高祖大師遊<sup>テ</sup>山<sup>ニ</sup>慕<sup>フ</sup>仙<sup>ヲ</sup>詩<sup>ニ</sup>云<sup>ク</sup>・眷属ハ猶如シ阿遮那  
ハ・坐ス中央<sup>ハ</sup>遮那<sup>ハ</sup>何<sup>レ</sup>誰<sup>カ</sup>号<sup>シテ</sup>本<sup>ト</sup>是<sup>レ</sup>

我カ心王ナリ・三密遍シ刹土ニ虚空ニ嚴ルニ道場ヲ山毫點ス・溟墨ニ乾坤ハ經籍ノ箱方  
象含ス一點ニ六塵閱ヒラチリ・縑緇ヲ○三千モ隘セハ行ノ歩ニ江海モ小シ一嘗ニ云々世出世  
之有増アラマシ者ハ費随ノ分々ニ之思上ヲ不ス遂ケ其望ヲ不サルコト課サ其願ヲ是レ  
多ヲホシ矣・聞三ヶハ我カ心王ハ是レ遮那・眷属ハ如シ雨ノ見ミ仰アウク我ヲ之衆生・  
幾許多カラム・国ハ十佛刹土ナレハ六十六ヶ国・何ソ為セム廣ト・六塵ハ悉ク文字ナレ  
ハ・天地ヲ為スス經箱ト聖教有ム何ノ乏コトカ故ニ謂フ三千モ隘ク行歩ニ江海モ小ニシト一  
嘗ニ況ヤ於邊地末代之報ニ乎雖トモ

然ト道俗随<sup>ニ</sup>己<sup>レ</sup>カ分位<sup>ニ</sup>欲ス令メムト繼後榮於子孫<sup>ニ</sup>又遁テ世ヲ隱ス跡ヲ於孤山之阿<sup>ノ</sup>クアニ者モ猶ヲ嗜タシナム當ヲ於紫ノ扉<sup>ソ</sup>ニ又田夫ノ之草ノ庵ニハ何ノ執カ留ラム哉ヤ雖トモ然<sup>ル</sup>ト随分ノ名利ハ貴賤皆ナ同シ然<sup>レ</sup>ハ者等閑有増事コトモ随テ其身<sup>ニ</sup>之品廻<sup>シ</sup>ナトモ情<sup>ヲ</sup>者ノ也ナリ我<sup>レ</sup>昇ラム无上覺位<sup>ニ</sup>之時キ以テ三世十方ノ諸佛ノ之正法ヲ令<sup>下</sup>テ有緣ノ衆生ヲ云<sup>フ</sup>何カ洛一度シ无縁ノ衆生ヲシテ云<sup>フ</sup>何カカ結<sup>中</sup>ハ因緣上ヲ云フ有増事ハ心更ニ雖シ廻<sup>リ</sup>矣如鼠手持物・自謂已能多ト者云ハ鼠ハ依テ自カ手一小<sup>キ</sup>ニ以テ米一粒ヲ謂ヲモヘリ多ト

誠ニ我等狹劣ノ之心ニ至マテモ有レ増事ニ約ス已カ分域ニ可シ為ス恥ト矣。況ヤ汝乍<sup>三</sup>  
 カラ手ニ握<sup>ニ</sup>成佛ノ印璽ノ還テ好<sup>三</sup>コノム為<sup>ニ</sup>タラムコトヲ貧賤ノ之民可シ悲ム々々寶樓閣  
 經云ク乃往古昔不可思議阿僧祇劫此ノ瞻部州ノ中ニ无シ有ルコト佛名有リ一ノ  
 大山山ノ中ニ有リ三ノ仙人三仙人繋心ヲ專念佛法僧寶ヲ後ニ作ス是ノ念ヲ我

等何ノ時ニカ證无上正覺ヲ度一脱セム一切ノ諸ノ衆生ヲ爾ノ時ニ彼ノ仙衆・作シ是ノ念ヲ已テ須臾ノアヒタ默然トシテ後ニ起ス前ノ念由是ノ念ニ故ニ即證ス大悲歡喜一切衆生種々樓

(五〇右)

閣三摩地・護於天眼・觀ニ彼ノ上方ヲ見ル淨居天・後ニ於テ空中ニ有テ聲言ク・曰フ善哉正士々々々々・能發シテ上願・求ムト大正覺<sup>アラマシ</sup>是レ則チ三仙人ノ有増之ノ心ロ忽得エ樓閣ノ三摩地・聞ク淨居天之讚歎ヲ既ニ无佛之時<sup>キ</sup>志願尚ヲ以テ如此・无一有佛名ノ之世<sup>ニ</sup>聞テ念シ三寶<sup>中</sup>起ツ無上大願<sup>上</sup>ヲ淨居天モ不<sup>五</sup>サル禁<sup>四</sup>イマシメ汝<sup>中</sup>既ニ生ス无佛世界<sup>ニ</sup>雖<sup>トモ</sup>有<sup>中</sup>リト志願不<sup>三</sup>トハ可<sup>ニ</sup>成也・我若シ指シテ六大无尋四曼不離三密加持ノ軌則<sup>ヲ</sup>高祖大師・謂イハ・判セリト即身成佛ノ之義<sup>ト</sup>者設ヒ雖<sup>トモ</sup>不爾<sup>ヲ</sup>深法

(五〇左)

有ル吾カ分<sup>ニ</sup>也ナリ・又既ニ有ルカ成佛願樂ノ之心故ニ善哉大士之語ハ苟クモ及ラム吾カ所<sup>ニ</sup>受記<sup>ニ</sup>如シ有カ現前受記秘密受記謂イヒテ空中ニ无ト聲不<sup>ス</sup>可<sup>ラ</sup>疑フ冥衆ノ知見ヲ也・謂<sup>下</sup>テ過テ十萬億ノ国而淨土有極樂界<sup>上</sup>ト尚繫ケ望<sup>ヲ</sup>期ス出離況ヤ深教ノ意ハ十佛刹<sup>ト</sup>者云ハ釋<sup>ス</sup>ニ超<sup>ニ</sup>ナリト十隨眠<sup>ヲ</sup>爾レハ超<sup>シテ</sup>十隨眠<sup>ヲ</sup>處セム本有覺城之宮殿<sup>ニ</sup>時己<sup>一</sup>心之性本<sup>一</sup>ト自<sup>一</sup>遍スレハ法界<sup>ニ</sup>十佛刹土ハ皆<sup>ナ</sup>ラム眼ノ前ノ之境界汝<sup>一</sup>チ惟<sup>ヘ</sup>シ修シテ三密ノ行<sup>ヲ</sup>僅<sup>ニ</sup>住セハ入我々入ノ之觀智<sup>ニ</sup>縱<sup>ヒ</sup>雖<sup>トモ</sup>未<sup>タ</sup>至<sup>ニ</sup>ラ衆相現前ノ之位<sup>ニ</sup>在テ道場<sup>ニ</sup>三密相應スル時<sup>キ</sup>

(五一右)

安<sup>一</sup>住シテ本尊ノ三摩地<sup>ニ</sup>一念不<sup>ス</sup>ハ眼前<sup>セ</sup>者設ヒ雖<sup>トモ</sup>隔<sup>一</sup>生スト此ノ業因所ノ熟<sup>スル</sup>感果其<sup>レ</sup>如何佛語<sup>ニ</sup>更<sup>ニ</sup>无<sup>シ</sup>疑<sup>ヒ</sup>豈<sup>ニ</sup>同<sup>セム</sup>餘行<sup>ニ</sup>乎ヤ矣・餓鬼慳貪業熟<sup>スレハ</sup>於テ清河<sup>ニ</sup>見ル膿流<sup>ヲ</sup>是不<sup>ス</sup>觀<sup>セ</sup>其<sup>ノ</sup>所<sup>由</sup>前世ノ業熟<sup>スレハ</sup>同業慳心之族<sup>ヲ</sup>幾ク千万

ソ臨<sup>テ</sup>恒河ノ之清流<sup>ニ</sup>見ル炎火膿流<sup>ヲ</sup>ノミ如夢如幻ノ之惡業<sup>ニ</sup>尚<sup>ラ</sup>以<sup>テ</sup>如此<sup>ノ</sup>雖<sup>トモ</sup>有<sup>ト</sup>厭捨<sup>ノ</sup>心感果更<sup>ニ</sup>无<sup>シ</sup>免<sup>カル</sup>コト況付<sup>テ</sup>三密修行之方軌<sup>ニ</sup>成<sup>一</sup>就スル本尊<sup>ヲ</sup>於己身<sup>ニ</sup>之時<sup>キ</sup>六大四曼<sup>ハ</sup>本<sup>一</sup>自生佛互<sup>ニ</sup>融ス纔<sup>ニ</sup>作<sup>ニ</sup>加持ノ之方便<sup>ヲ</sup>現身<sup>ニ</sup>同<sup>ス</sup>位<sup>ヲ</sup>本尊<sup>ニ</sup>

(五一左)

死生ハ是<sup>レ</sup>妄情ノ分別ナリ也・不<sup>ス</sup>待<sup>タ</sup>來報<sup>ヲ</sup>法樂在<sup>リ</sup>身<sup>ニ</sup>矣<sup>下</sup>

六大無尋義抄卷下 一交了

(五二右)

…一丁分墨付きなし…

(五二左)

本云

寛元五年<sup>末</sup>丁二月二日子尅於高山寺東谷禪庵依一人之懇情卒爾草之畢 東谷隱侶高信

元是假名也彼草於高山寺林師令一見賜了 其後依同侶勸進成真名畢矣

(五三右)

建長四年<sup>子</sup>壬二月廿八日於丹州神尾山北谷草室聊加點畢遂可再治之也矣 山中非人高信



註

- (1) 明恵門下および高山寺における教學展開については、納富常天「高山寺教學の展開―丹州神尾山寺を中心として―」（『金澤文庫資料の研究―稀觀資料篇―』一九九五）、同「解説―高信編『解脫門義聴集記』―」（『金沢文庫研究紀要』四）等参照。また、喜海の生涯と思想については、田中久夫「義林房喜海の生涯」（『鎌倉仏教雑考』一九八二）、柏木弘雄「明恵上人門流における華嚴教學の一面―『起信論本疏聴集記』をめぐる―」（『田村芳朗博士還暦記念論集 仏教教理の研究』（一九八二）、前川健一「真如觀はやすかりぬべき物也―『起信論本疏聴集記』に於ける喜海説」（『木村清孝博士還暦記念論集 東アジア仏教―その成立と展開』二〇〇二）等参照。

- (2) 諸本については拙稿「明恵門下における『即身成仏義』解釈―高信撰『六大無碍義抄』上巻翻刻―」（『仏教學研究』六二・六三合併号、二〇〇七）において整理を行った。

- (3) 『六大無碍義抄』上巻部分の翻刻については、前掲注二拙稿参照。

- (4) 『鎌倉時代語研究』一五、一九九二、同「唐招提寺藏『六大無碍義抄』二帖（二）―下帖影印並びに内容解説―」（『鎌倉時代語研究』一六、一九九三）参照。前掲注二拙稿において本論文を未見であったことを遺憾とするものである。

- (5) 仮名書きから漢文体への変更については、喜海による『明恵上人行状』（仮名行状・漢文行状）と共通した作業であることが注目される。『明恵上人行状』における仮名から漢文への変化については、築島裕氏が「仮名行状はそのまま明恵の行状を伝えるものとして世に出るべきものではなく、漢訳して正統的なものとして世に問ふ、或は世に残すといふ意識があつたのではなからうか」（『明恵上人資料一』七〇三頁）と指摘するが、本書においても同様の意図をうかがうことができる。

- (6) ○高山寺藏本下巻末奥書

寛元五年（丁未）二月二日子尅於高山寺東谷禪庵依一人之懇情卒爾草之畢

東谷隱侶高信

元是假名也彼草於高山寺林師令一見（※傍書…義林房喜海事也）賜了其後依同侶勸進成真名畢矣

建長四年（壬子）二月廿八日於丹州神尾山北谷草室聊加點畢遂可再治之也矣

山中非人高信

此抄上下明恵上人弟子作也（神尾中興開山号順性）

- (7) 『高山寺経藏典籍文書目録』第一では書写時期を「鎌倉後期」とする（一八四頁上・下）

- (8) 前掲注四「一九九二」論文（二三六頁）参照。

- (9) 前掲注二拙稿参照。

- (10) 『華嚴修禪觀照入解脫門義』巻下（大日本仏教全書一三、一〇〇頁上）等参照。

- (11) 『善財五十五善知識行位抄』巻上（大日本仏教全書一三、二三〇頁下）等参照。

- (12) 「三発心者謂始從具縛不識三宝名字等。創起一念信等。此約始教。」（大正三五、一七五頁下）。ただし法藏においては大乘始教における信について述べられている箇所である。

- (13) 大日本仏教全書一三、一三二頁下

- (14) 『善財五十五善知識行位抄』巻上（大日本仏教全書一三、二四四頁上・下）

- (15) 前掲注二拙稿参照。

- (16) 小宮俊海氏は、「真言密教における「初地即極」と華嚴思想を根拠とする「信満成仏」を会通することにより一乗教の即身成仏が可能となると考えたのではないだろうか」と指摘する。（明恵の即身成仏について―明恵門下聞書類を手掛りとして―）『智山学報』六〇、二〇一一、一一九頁）

- (17) 本書における「我宗」の用例は前一二例あり、いずれも真言宗を示している（三左、一七右、二六右、二六左、二七左、三四左、三五右、四〇右、四一右、四三右）。

- (18) 拙稿「順性房高信と頼瑠―頼瑠教學に与えた高山寺密教學の影響―」（『印度

学仏教学研究』五五・二、二〇〇七。

- (19) 「受」字、見せ消ちあり。左に「更」と傍書する。
- (20) 補入符右に「等」と墨書あり
- (21) 「三」字、京大本になし
- (22) 「為」字、京大本になし
- (23) 「之」字、京大本になし
- (24) 「云」字、京大本になし
- (25) 補入符右に「无差別是平等」と墨書あり
- (26) 「心」字、見せ消ちあり
- (27) 補入符右に「有情」と墨書あり
- (28) 補入符右に「之」と墨書あり
- (29) 「時」字左上に濁音を示す聲点あり
- (30) 補入符右に「者<sup>ハ</sup>」と墨書あり
- (31) 補入符右「別」と墨書あり
- (32) 「時」字左上に濁音を示す聲点あり
- (33) 「時」字左上に濁音を示す聲点あり
- (34) 本紙上欄に「地」と挿入あり
- (35) 補入符右に「成<sup>コトヲ</sup>」と墨書あり
- (36) 補入符右に「一」と墨書あり
- (37) 本紙左に「二大乘始教<sup>行満ニ成佛ノ三終教<sup>相續性</sup></sup>」と墨書にて補入あり
- (38) 補入符右に「以<sup>ノ</sup>」と墨書あり
- (39) 補入符右に「故<sup>ヘ</sup>」と墨書あり
- (40) 「信」字、京大本に「心」と作る
- (41) 補入符右に「信<sup>ス</sup>」と墨書あり
- (42) 補入符右に「故<sup>ニ</sup>」と墨書あり
- (43) 補入符右に「生」と墨書あり
- (44) 「食」字左下に濁点を示す聲点、「噉」字左上に聲点あり(墨書)

- (45) 補入符下に「為<sup>シ</sup>」と墨書あり
- (46) 補入符右に「身<sup>ト</sup>」と墨書あり
- (47) 「出」字、京大本に「施」と作る
- (48) 「可」字、京大本になし
- (49) 補入符右に「者<sup>ラハ</sup>」と墨書あり
- (50) 「門」字、京大本に「行」と作る
- (51) 「垂」字、京大本に「在」と作る
- (52) 「觀」字、京大本になし
- (53) 補入符右に「物」と墨書あり
- (54) 補入符右に「後」と墨書あり
- (55) 補入符下に「一生」と墨書あり
- (56) 補入符右に「於後々<sup>ノ</sup>生<sup>ニ</sup>」と墨書あり
- (57) 補入符右に「非<sup>ス</sup>」と墨書あり
- (58) 「而」字、京大本に「然」と作る
- (59) 本紙欄外右に「放光動地<sup>ハ</sup>天魔惡鬼<sup>ニ</sup>尚作之<sup>ヲ</sup>何必<sup>シモ</sup>為<sup>セム</sup>」と補入あり
- (60) 京大本に「乃」とあり
- (61) 補入符右に「實<sup>ニ</sup>」と墨書あり
- (62) 本紙欄外右に「實<sup>ニ</sup>如<sup>ク</sup>實<sup>ノ</sup>見<sup>ル</sup>力<sup>カ</sup>故<sup>ニ</sup>此<sup>ヲ</sup>云<sup>ク</sup>眞實作意<sup>ト</sup>也<sup>ナリ</sup>・況<sup>ヤ</sup>一乗<sup>ヤ</sup>」と補入あり
- (63) 「入即」の二字、京大本に「之」とする。
- (64) 補入符右に「不成<sup>ヲ</sup>」と墨書あり
- (65) 「新」字、京大本に「斯」と作る
- (66) 「日」字、京大本に「由」と作る
- (67) 「言」字左上に濁音を示す聲点あり
- (68) 補入符右に「不出<sup>サ</sup>」と墨書あり
- (69) 補入符右に「断<sup>ツ</sup>」と墨書あり
- (70) 「三」字、京大本に「一」と作る

(71) 補入符右に「法」と墨書あり

(72) 「期<sup>シテ</sup>何ノ時<sup>ソカ</sup>先師ノ法驗何<sup>ソ</sup>輒<sup>ケ</sup>記<sup>セム</sup>一二矣但<sup>タ</sup>、為<sup>スニ</sup>」

(73) 補入符右に「成」と墨書あり

(74) 「又」字、京大本になし

(75) 以下、京大本では次の通り。

「寛元五年<sup>未<sup>ナ</sup>丁</sup>二月二日子尅於高山寺東谷禪庵依一人之懇情卒爾草之畢

東谷隱侶高信

元是假名也彼草於高山寺<sup>義林房喜海事也</sup>林<sup>義林房喜海事也</sup>師令一見賜畢其後依同侶勸進成真名畢矣

建長四年<sup>壬<sup>ミ</sup>子</sup>二月廿八日於丹州神尾山北谷草室聊加點畢遂可再治之也矣

山中非人高信

此抄上下明恵上人弟子作也<sup>神尾中興開山順性上人</sup>